

預買の法を行ふ。諸路をして豫め錢を給して紬絹を和買せしむ。

趙抃罷む。抃日に爲す所の事、夜は必ず香を焚いて天に告ぐ。

擢んでて第一となす。擢んでて第一となす。擢んでて第一となす。

右正言孫覺、御史裏行程顥、新法を議するを以て罷む。

中丞呂公著、裏行張戢、新法を議するを以て罷む。

李定、裏行となる。知制誥宋敏求、蘇頌、李大臨、定の詞頭を繳するを以て罷む。

謝景溫、御史知雜となる。

直史館蘇轍、嘗て、萬言の書を上り、及び廷試策に對するに擬し、

新法を議して、安石に忤ふを以て、景溫に劾せられて去る。

鄧綰、上書して言ふ、陛下、伊呂の佐を得たり、百姓の青苗免役

等の法を歌舞すと。又、安石に書及び頌を與ふ。中書檢正を置き、

綰を以て之を爲さしむ。郷人、皆、笑罵す。綰曰く笑罵は佗の笑罵

に從す。好官は、我、之を爲すべしと。

曾公亮、罷む。

制科の人を策す。劉陶、張繪、孔文仲、力めて新法を詆る。皆、

報じて罷む。

范鎮、數ば新法を議し、及び、嘗て蘇軾、孔文仲を薦めしを以て

報じて罷む。

宋一神宗皇帝

評
の笑罵は佗
かす好官は
我之を爲す
者豈鄧綰の
みならんや

罷めらる。乞うて致仕す。陳升之、罷む。

韓絳、王安石、同平章事たり。

保甲の法

保甲の法を立つ。

會布、中書檢正となる。

科擧の法を更め、詩賦明經の諸科を罷め、經義論を以て進士を策試す。

三不足の説

司馬光、さきに學士より、樞副に除せらる。力辭して拜せず。數ば、新法の害を言ふ。上、安石に諭して曰く、三不足の説を聞くや否や。曰く、聞かず。上曰く、外人云ふ、朝廷以爲へらく、天變畏るるに足らず。人言恤ふるに足らず、祖宗の法守るに足らずと。昨

學士院、館職の策問を進む、専ら、この三事を指すと。策問は、光の爲る所なり。光、屢ば外を請ひ、永興を得たり、許州に移る。上言すらく、臣の不才、最も群臣の下に出づ、先見は呂誨に如かず、公直は范純仁、程顥に如かず、敢言は蘇軾、孔文仲に如かず、勇決は范鎮に如かずと。屢ば、西京留守御史臺に判たらむことを請ふ。是に至つて、請を得。後、四たび任せられて、嵩山崇福宮に提舉たり。

歐陽修、さきに青州に知たり。擅に青苗錢を給散するを止むるを以て、徙つて、蔡州に知たり。是に至つて、乞うて致仕す。富弼、さきに亳州に知たり。青苗の法を格するに坐して、徙つて

汝州ぢゆうしゆうに知たり。

中丞楊繪ちゆうじやうやうくわい、裏行劉摯りかうりうし、新法を議するを以て罷めらる。

差役を罷む。募役ぼえきの法を行ふ。

大學三舍だいがくしやの法を立つ。

市易しえきの法を行ふ。

保馬ほうばの法を行ふ。

方田均稅ほうてんきんぜいの法を頒つ。

熙河路きかろを置き、王韶わうせうを以て經略安撫等の使となす。之より先、韶

平戎へいじゆうの策を上る。謂ふ、西夏せいしかを平らげむと欲せば、當に河湟かくわうを復す

べし。今、古渭こゐの西、熙河蘭鄯きからんぜん、皆、漢かんの隴西らうせい等の郡なり。吐蕃とはん唃

募役の法
大學三舍の法
市易の法
保馬の法
方田均稅の法

厮囉しらくらの一族、この間に國す。宜しく、之を併有して、以て夏人かじんの右

臂ひを絶つべしと。安石あんせき、以て奇謀きぼうとなし、始めて熙河きかの役を開く。

韶せう、河、洮たう、岷びん、疊てう、宕等たうの州に克ち、又、青唐せいとう咽喉いんこうの地に據る。

邊墩へんこん益す斥とほざかり、役兵えきへいの死亡甚だ多し。

中書檢正章惇ちゆうしよけんせいしやうぢゆん、湖北こくほくに察訪す。始めて、議して、南北江蠻辰州なんぼくこうはんしんしゆう

を經制す。南北江なんぼくこうは、乃ち古しへの錦州きんしゆうの地、施黔しきん牂牁やうかに接す。章

惇ぢゆんに命じて、措置そちせしむ。惇言ふ、梅山はいさんの蠻はん貉えうを招諭せうゆし、令して、

戸こを省くを作せば、皆歡迎みなくわんげいせむと。其實そのじつは殺戮さつりつし、浮屍江ふしこうを蔽おほふ。

詩、書、周禮しゅうらい、三經義局けいぎぎよくを置く。安石あんせき、提舉ていきよたり、呂惠卿りけい及び安

石せきの子雱等こはうら、檢討けんたうたり。

熙寧七年、天、久しく雨ふらず。河の東北、陝西の流民、皆、流れて京城に入る。而して、京城の外、饑民尤も多し。監安上門鄭俠、畫いて圖となし、上書して曰く、陛下、南征北伐、皆、勝捷の勢を以て、圖を作して來り上る。一人として、天下憂苦、妻子相保せず、遷移困頓、遑遑給せざるの状を以て、圖を爲して、獻する者なし。安上門、日を逐うて見る所、百、一に及ばず、亦た涕を流すべし。況んや、千萬里の外をやと。時に、旱を以ての故に、直言を求む。言者、皆、新法を咎む。上、疑うて、之を罷めむと欲す。安石、悦ばず。去るを求む。知江寧府に拜せらる。安石、韓絳を薦めて、己に代つて、相となし、呂惠卿を參政となす。時に、絳を號し

手實の法

て傳法沙門となし、惠卿を護法善神となす。惠卿、建議す、免役出錢、均しからざるは、簿書の不善に出づと。手實の法を行ふ。惠卿既に勢を得、安石の復た入るを恐れて、遂に逆め其途を閉ぢ、安石の私書を出すに、上をして知らしむる勿れ、の語あり。凡そ、以て安石を害すべき者、其智を用ゐざる所なし。又、數ば、絳と忤ふ。絳、閒に乗じて、上に白し、復た安石を相とす。安石、罷めて一年ならず、再び入る。命を聞いて辭せず、金陵より、七日にして、闕下に至る。後數月、絳、惠卿と相繼いで罷む。

戸馬の法を行ふ。

判相州韓琦、薨す。琦、天資忠厚、能く大事を斷ず。治平の閒

宋一神宗皇帝

評
韓琦固よ
非とす。而
も朝議之を
強行するや
即ち命給て
之を散給し
て藩臣の體
を示す。常
人の爲し得
ざる所なり

首相となり、政事は集賢に問ひ、典故は東廳に問ひ、文學は西廳に問ひ、大事は自ら之を決す。出てで相州に判たり。初め、青苗の不便を言ふ。朝廷、従はず。即ち命じて散給して曰く、藩臣の體、當に是の如くなるべしと。郷郡に在ること、八年にして終る。御製の碑に曰く、兩朝顧命定策元勳之碑と。
韓縝に命じ、河東に如いて、地を割かしむ。之より先、遼使、屢ば至つて言ふ、河東は邊に沿うて成壘を増修し、舖舎を起して、かの國の蔚應朔の州界に侵入す、乞ふ毀撤を行ひ、別に界至を立てむと。蓋し、遼人、朝廷の高麗を招き、熙河を建て、西山に榆柳を植る、保甲を創め、河北の城地を築き、都作院を創め、弓刀の新様を

鄂

法王の安石は
とて二大石は
及ぶ通じ十家
之に朝をての
四に朝をての
之に朝をての
なる所其及ぶ
亦近代的社會
政策の代新法
主義に合經濟
五百年の業前
立法事業との

降し、界北の三十七將を置くを見て、燕を復するの意あるを疑ひ、故に地界を争ふを以て名となし、朝廷の應ずる所以を觀る。安石、之を斷じて曰く、將に之を取らむと欲すれば必ず姑く之を與ふと。東西地を失ふこと七百里。

安石再び相たること二年、屢ば病を謝す。子雱死す、去るを求むること、尤も力む。上、益す、其爲す所を厭ひ、出して江寧府に判たらしめ、遂に復た用ゐられず。安石の事を用ゐしより、口に先王を談じて、専ら管商の政を行ひ、上の富強の志あるを知つて、其欲を濟す所以を思ふ。謂へらく、法を立つるには、當に小人を用ゐて後に、君子を以て之を守らしむべしと。其是理なきを悟らざる

して之を見
れば極むと
いふも其
然れども
人多く乏
數且つ獨
徳量に乏
く且つ獨
專行に忍
り雅量之
せり馬温
司望に公
徳望に公
なれたる
所に以て

なり。天下騒然として、國未だ嘗て富まず。邊鄙事を生じ、徒に多
く喪敗して、國未だ嘗て強からず。西鄙は、治平の末、仲諤、綏州
を取りしより、夏人、即ち兵を興して、報復せむと欲す。
夏王諒祚卒す。子秉常立つ。大に入寇す。安石、王韶、熙河を取
るの策を用ゆと雖も、徒に怨を西蕃に構へて、鬼章等、屢ば寇患
をなすを致し、初めより、此を以て、西夏を制する能はず。用ゆる
所の沈起、劉彝、又、釁を南方に生ず。
交趾の李日遵、卒す。子乾徳、立つ。起彝、相繼いで、桂州に知
たり。土丁を集めて、保甲となし、海濱に於て、舟師を集めて、水
戦を教へ、州縣、交人と貿易するを禁止す。交人、大舉して入寇し、

蘇東坡黃州
に安置せら
る

邑州を圍み、欽廉を陥る。聲言すらく、中國、青苗助役の法を作
つて、以て民を困む、兵を出して、相救はむと。安石、怒り、趙鼎
等を遣して、之を討たしむ。官軍死する者。十に六。兵禍、安石の
去るに訖るまで、未だ已まず。吳充、王珪、安石に繼いで相となる。
充、さきに政府に在り、數ば政事の非便を言ふ。既にして、安石に
代る。蔡確、鄧潤甫等、共に之を攻むるも、去らしむる能はず。
元豐元年。知湖州蘇軾を黃州に安置す。之より先、中丞李定言
ふ、軾、熙寧より以來、君父を怨謗すと。舒亶も亦た言ふ、軾、時
事を議す。陛下、錢本を發して以て貧民を業くれば、曰く、贏ち得
たり。兒童語音の好き、一年強半は城中に在りと。明法以て群吏を

課試すれば、曰く、讀書萬卷、律を讀まず、君を堯舜に致す、終に術なしと。水利を興せば、曰く、東海もし明主の意を知らば、斥鹵をして桑田に變せしむべしと。鹽禁を謹めば、曰く、豈に是れ詔を聞いて味を忘るるを解せむや、邇來三月食に鹽なしと。其他、物に觸れ、事に即いて、譏謗を以て、主となさざるなしと。乃ち軾を追うて、御史の獄に繋ぎ、定と張璪とに命じて推治せしむ。王珪言ふ、軾、不臣の意ありと。軾の檜の詩を擧ぐ。根は九泉に到つて曲處なし、世間惟だ蟄龍の知るありと。陛下、飛龍天に御す。然るに軾、彼は之を地下の蟄龍に求む、不臣に非ずして何ぞ。上曰く、彼自ら檜を詠ず、何ぞ朕の事に預らむと。上、もと軾を罪するに意なし。

吳充、王安禮、皆、上に勸めて、之を容るさしむ。獄成つて、是命あり。弟轍、亦た軾を救ふに坐して貶せらる。軾の詩案に坐して、黜罰せらるる者、張方平、司馬光以下、二十二人。上、實に軾を憐む。尋いで、汝州に移し、復た用ゐむとす。蔡確、張璪等の爲に沮まる。吳充、罷む。月を踰えて卒す。元豐元年、大に官名を正し、元豐五年、官制成る。平章事を改めて、左右僕射となし、王珪、蔡確を以て之となし、參知政事を門下中書侍郎となし、章惇、張璪を之となし、尙書左右丞を置き、蒲宗孟、王安禮を之となす。三省を以て、百議を統領し、中書、旨を取

三旨宰相

十八史略卷之六

美

り、門下、覆奏し、尙書、施行す。珪、相となる。人、之を三旨宰相といふ。凡そ、事、惟だ聖旨を取るといひ、聖旨を得れば聖旨を領すといひ、退いて之を書すれば聖旨を奏すといふのみ。上、之を厭ふ。確、珪に謂つて曰く、上、久しく靈武を取らむと欲す、公、能く責に任ずれば、相位保つべきなりと。珪、喜んで、其言の如くし、内侍李憲に命じ、道を分つて、夏國を伐ち、靈州を攻むれども克たず。士卒死し、及び凍餒する者、十に五六。憲、再舉の議を上る。徐禧、又承樂の新城を築くを議す。夏人、大舉して城を攻む。城、陷る。禧等、蕃漢官及び諸軍、死する者萬三千。上、奏を聞いて慟哭す。

富弼遺表を上る

評
治通鑑の著
蓋し文獻と
滅といふべ
し

富弼、遺表を上る。言ふ、忠諫杜絶、諂諛日に進み、興利の臣、國の爲に怨を斂む。又言ふ、西事大に憂ふべし、望むらくは聖念を留めよと。弼、早く公輔の望あり、名、夷狄に聞こゆ。遼使至る毎に、必ず其出處安否を問ふ。忠義の性老いて彌よ篤く、家居一紀、斯須も朝廷を忘れず。是に至つて薨す。弼、遺表に曰く、人材、宰相同じく對す。上、人材なきの歎あり。蒲宗孟曰く、人材、半は司馬光の邪説に壞らると。上、語らず、宗孟を視ること、之に久しうして曰く、蒲宗孟は乃ち司馬光を取らざるかと。宗孟、尋いで罷む。司馬光の資治通鑑成る。上、即位の初、既に嘗て御製の序あり。元豐七年に至つて、書、始めて上る。初め、官制、將に

宋一神宗皇帝

七

行はれむとす。上、新舊人を取つて、兩つながら、之を用ゐむと欲す。曰く、御史大夫は司馬光に非ざれば不可なり。蔡確曰く、國是方に定まる。願はくは、少しく之を遅てと。既にして上、疾あり。又曰く、來春、儲を建つれば、當に司馬光、呂公著を以て師保となすべしと。公著は、夷簡の子なり。上、在位十八年。改元するもの二、曰く、熙寧、元豐。精を勵まし。治を求め、日昃、食に暇あらず。平生、政遊を御せず、宮室を治めず、惟れ勤、惟れ儉、將に以て大に爲すあらむとするなり。奈何せん、熙寧以來、安石に誤られ、元豐以後、事を用ゆる者、終始、皆、安石の黨、竟に天下の患となる。北狄の倔強を憤つて、慨然として、幽燕を恢復するの志あり、

先づ靈夏を取り、西羌を滅し、乃ち北伐を圖らむと欲す。安南律を失ふに及びて、喟然として、赤子罪なくして死するを歎じ、永樂の敗、益す用兵の難を知り、初めて、征伐を念ふを息め、卒に一事意の如くなるなし。崩す。年三十八。皇太子立つ、之を哲宗皇帝となす。

評譯 十八史略 卷之七

宋

【哲宗皇帝】名は煦、初め、延安郡王たり。神宗大漸立つて太子となる。之より先、蔡確、舍人邢恕を遣して、高公繪を邀へ、太后に白せしめむと欲す。言ふ、延安は冲幼、岐嘉、皆、賢王なりと。公繪、懼れて曰く、公、吾が家に禍せむと欲するか、亟に去れと。恕、禍心を包藏し、反つて謂ふ、太后、王珪と表裏し、延安を捨て、子顥を立てむと欲し、己及び章惇、蔡確に頼つて變なきを得

宋一哲宗皇帝一

夫一

太皇太后新法を廢止す

たりと。且つ其説を士大夫の間に播く。神宗、崩じて、太子位に即く、始めて十歳。太皇太后、同じく政を聽く。熙寧中、太后、既に嘗て流涕して、神宗の爲に言ふ、安石の變法便ならずと。既に、簾を垂れて、天下厭苦すること日久しきを知り、首として、東京の戸馬を罷め、京の東西路の保馬を罷め、京の東西の物貨場を罷め、諸州鎮寨市易の抵當を罷め、汴河堤岸司の地課、放市易、常平免役の息錢を罷め、在京免行錢を罷め、提舉、保甲、錢糧、巡教等の官を罷め、方田等を罷む。皆、中より出で、大臣は與らず。

王珪卒す。蔡確、韓縝、左右僕射となり、章惇、樞密院に知り。司馬光、門下侍郎たり。光、洛に居ること十五年、兒童走卒も

皆司馬君實を知る。神宗升遐、闕に赴いて入つて臨むや、衛士望見し、手を以て額に加へて曰く、司馬相公なりと。争つて、馬首を擁して呼んで曰く、公、洛に歸る勿れ。留まつて天子に相として、百姓を活かせと。所在數千人、之を聚觀す。光、懼れて洛に歸る。既にして、召されて執政となる。

程子卒す
周惇頤字茂叔

河南の程顥、この歳を以て卒す。顥、字は伯淳。弟頤、字は正叔。兄弟、皆濂溪の周惇頤に従つて學を受く。惇頤、字は茂叔、博學力行、道を聞くこと早く、事に遇うて剛果、古人の風あり。政を爲すこと嚴恕、務めて理を盡し、名節を以て自ら礪く。雅より高趣あり、牕前の草を除かず、曰く、自家の意思と一般なりと。黃庭

宋一哲宗皇帝一

堅、稱す、其人品、甚だ高く、胸中洒落、光風霽月の如しと。太極圖、通書あり、世に行はる。顓、頤、初め之に従ふ。首として、仲尼、顔子、樂む所は、何事なるかを尋ねしむ。學成る。各、斯文を以て己の任となす。顓、嘗て言ふ、一命以上、苟くも心を愛するに存すれば、人に於て、必ず濟す所あらむと、熙寧中、新法合はざるを以て、國を去る。神宗、嘗て人才を推擇せしむ。薦むる所、數十人、表叔張載と弟頤とを以て首となす。其死するや、文彦博衆論を採り、其墓に表して明道先生といひ、而して、弟頤、之が序を爲つて曰く、周公没して、聖人の道、行はれず。孟子死して、聖人の學、傳はらず。道、行はれざれば、百世善治なく、學傳はら

ざれば、千載眞儒なし。善治なくとも、士、尙ほ、かの善治の道を明かにして之を人に淑し、以て之を後に傳ふるを得。眞儒なければ、天下賀賀焉として之く所なく、人欲肆にして天理滅せむ。先生、千四百年の後に生まれ、不傳の學を遺經に得、異端を辨じ、邪説を息め、聖人の道をして、復た世に明かならしむ。蓋し、孟子の後より一人のみと。頤、嘗て、人に語る。吾の道を知らむと欲せば、この序を觀て可なりと。張載、字は子厚。初め、學ばざる所なし。後、二程の言を聞いて、乃ち盡く其學を棄てて講ず。東銘、西銘、正蒙、理窟等の書あり、世に行はる。人、之を橫渠先生といふ。共城の邵雍、字は堯夫、河南に居り、二程と友たり。雍の學、心を玩

ぶこと高明にして、天地の變化、陰陽の消長を觀、以て萬物の變に達し、物數に精しく、推して中らざるなし。顓、嘗て、考試院に在り。其數を以て之を推し、出でて雍に謂つて曰く、堯夫の數は、只だ是れ加一倍の法なりと。雍、其聰明を歎す。雍、數學を以て二程に傳へむと欲す。二程、受けず。邢恕、受けむと欲す。雍、許さずして曰く、徒に姦雄を長すと。雍に皇極經世書十二卷、擊壤集歌あり。世に傳ふ。人、之を康節先生といふ。富弼、司馬光等、皆深く之を敬重す。宋は、歐陽修、古文を以て天下に唱へしより文章大に變すと雖も、然も、儒者義理の學は、周程出づるに至つて、然る後に明かなり。雍、惇頤、載、皆、神宗の世に歿す。是に至つて、

顓、又歿し、惟だ頤のみあり。學者之を宗とし、伊川先生といふ。元祐元年、蔡確、罷む、確、章惇、邢恕と相交結す。恕、往來、語言を傳送し、自ら定策の功ありといふ。言官王覲、惇、確及び韓縝、張璪の朋邪を極言し、劾撃、朱光庭、蘇轍、數十疏を累ねて、論劾す。確、先づ黜けらる。司馬光を以て、左僕射となす。時に、王安石、既に病む。其弟、邸吏の狀を以て之に示す。安石曰く、司馬十二、相となる。惇然之を久しうす。議者、或は謂ふ、三年、父の道を改むるなし。新法、しばらく稍や、其甚しき者を損じて足らむと。光、慨然、之を争つて曰く、先帝の法、善きものは、百世と雖も變ずべからず、安石、惠卿等の建つる所の如き、天下の

害を爲し、先帝の本意に非ざるものは、當に焚を救ひ、溺を拯ふが如くなるべく、猶ほ及ばざるを恐る、況んや、太皇太后、母を以て子を改む、子を改むに非ざるをやと。衆議乃ち定まる。或ひと、光に謂つて曰く、章惇、呂惠卿の輩、他日、父子の議を以て、上に聞するあらば、朋黨の禍、作らむと。光、起立拱手し、厲聲して曰く、天、若し宋に祚すれば、必ず此事なからむと。安石、朝廷、其法を變ずるを聞く毎に、夷然として以て意となさず。助役を罷め、差役を復するを聞くに及びて、愕然失聲して曰く、亦た罷めて此に至れるかと。良や久しうして曰く、この法、終に罷むべからず。安石、先帝と之を議する二年にして、乃ち行ふ、曲盡せざるなしと。

王安石卒す

章惇、韓縝、罷む。

王安石、卒す。安石、金陵に在つて、常に福建子と獨語す。惠卿を恨んでなり。惠卿、安石に叛く。唯だ章惇のみは、終始叛かず。

安石、又常に曰く、新法の行はるるや、始終以て行ふべしとなす者は曾子宣なり。始終以て不可となす者は司馬君實なりと。

呂公著、右僕射たり。文彥博、軍國重事たり。程頤、崇政殿説書たり。蘇軾、翰林學士たり。呂惠卿、鄧綰等を竄貶す。

司馬光薨す

司馬光、相となつて八閱月にして薨す。太皇太后、之を哭して慟す。

上、亦た感涕して已まず。太師溫國公を贈り、文正と謚す。光、位に在るや、遼人、夏人の使來る時、必ず光の起居を問ふ。而

宋一哲宗皇帝

表

評
 年は司馬温公
 稀に四温千
 徳望に見る
 其家人とな
 り、玲瓏玉
 の如く眞に
 温國公を贈
 らるる文正
 諡さるる夫
 足るに敵し
 邪は正に勝
 たず、智勇諸

して、遼人、其邊吏に敕して曰く、中國、司馬を相とす、切に事を
 生じて邊隙を開く勿れと。卒するに及びて、京師の民、市を罷め、
 其像を畫し、印して之を鬻ぎ、畫工富を致す者あり、葬るに及びて
 四方來會する者、之を哭して、其親戚を哭するが如し。光、嘗て、
 晁無咎に語つて曰く、吾、人に過ぎたるなし、惟だ平生爲す所、未
 だ嘗て人に對して言ふべからざるものあらざるのみと。劉安世、光
 に一言以て終身之行ふべきものを問ふ。光曰く、それ誠かと。安
 世、其從つて入る所を問ふ。曰く、妄語せざるより入ると。
 蘇軾、程頤、同じく經筵に在り、軾、諧謔を喜ぶ、而して、頤は
 禮法を以て自ら持す。軾、毎に之を嘲侮す。光の薨するや、百官、

能の徳は古
 たざるは通
 今東西の王
 義なり、才
 安石の才、能
 を以て敵し
 温公に敵し
 得ざるに敵
 なるかな

方に慶禮あり、事畢つて、往いて弔はむと欲す。頤、可かずして曰
 く、子、この日に於て哭すれば歌はず。或は曰く、歌へば哭せずと
 いはず。軾曰く、是れ枉死市の叔孫通、この禮を制するなりと。
 頤、怒る。二人、遂に隙を成す。門人朱光庭、賈易、言官たり、力
 めて軾を攻む。傅堯俞、王巖叟、呂陶等、相繼いで論列す。堯俞、
 巖叟は光庭を右け、陶は軾を右く。この時、元豐の大臣、散地に退
 き、皆、怨を銜んで、骨に入り、陰に間隙を伺ふ。諸賢悟らず、方
 に自ら黨を分つて相攻む。洛黨、川黨、朔黨あり。洛黨は、頤を以
 て領袖となし、光庭、易、羽翼たり。川黨は、軾を以て領袖とな
 し、陶等、羽翼たり。朔黨は、劉摯、王巖叟、劉安世を以て領袖と

なして、羽翼尤も衆し。未だ幾ならずして、頤、罷めて復た召されず。之を久しうして、軾、亦た罷め、後、再び入り、三たび入り、皆、久しからずして出づ。

呂公著、司空同平章軍國事となり、呂大防、范純仁、左右僕射たり。純仁は、仲淹の子なり。公著、尋いで薨す。知漢陽軍吳處厚、言ふ。蔡確、安州に謫せらるるの日、夏中、車蓋亭に登るの詩を作つて、臺諫を譏訕すと。確を論じて已まず。新州に安置す。呂大防、劉摯、范純仁、王存等、以爲へらく、宜しく嶺を過ぎて、死地に置かしむべからずと。純仁曰く、この路、荆棘八十年、奈何ぞ之を開かむ。吾曹、政に免れざるを恐るるのみと。

之を争へども、得ず。臺諫、交章して、純仁の確に黨するを攻む。純仁、遂に罷む。劉摯、右僕射となる。大防、摯、元豊の黨人を引いて、以て舊怨を平らげむと欲す。之を調停といふ。蘇轍等、力めて、其不可を陳す。摯、罷む。蘇頌、右僕射たり。頌罷む。純仁、又、之に代る。

元祐八年九月、宣仁聖烈太皇太后崩す。崩するに臨み、上に對して、大防、純仁等に謂つて曰く、老身歿後、必ず官家を調戲する者あらむ。宜しく、之を聽くなかるべし。公等、亦た宜しく早く退くべし。官家をして、別に一番の人を用ゐしめよと。左右を呼んで問ふ、嘗て、社飯を賜ひ、出すや否やと。因つて曰く、公等各去つて

宋一哲宗皇帝一

七三

一匙しの社飯しゃはんを喫きつし、明年めいねん社飯しゃはんの時とき、老身らうしんを思量しりやうせよと。后こう、政まつりごとを聽きくこと九年くわんねん、天下てんか稱しょうして女中ぢよちゆうの堯舜げうしゆんとなし、外家ぐわいかに比ひせず。嗣君しきんを擁佐ようさするの故ゆゑを以もつて、二子にこ一女いちによ、皆みな、疎うとんせらる。至公しこうを以もつて、天下てんかを御ぎよし、當世たうせいの賢者けんじや、畢ことごとくく朝てうに集あつまる。君子きんしの盛せい、後世こうせい、慶曆けいりき、元祐げんいうを以もつて並稱へいしやうす。神宗しんそう、兵へいを厭いとふの後のちを承うけて民たみと休息きゆうそくす。西蕃さいはんの鬼章きしやう、邊將へんしやうの爲ために擒獻きんけんせらる。釋ゆるして誅ちゆうせず、以もつて其部屬そのぶぞくを招まねく。夏國かこく、其主そのしゆ兼常けんじやう卒しゆつし、乾順けんじゆん立つてより、政亂せいらんれ、主幼しゆえう、屢しばしばば邊へんに寇かうして、藩臣はんしんの禮れいを失しふ、皆みな、強臣きやうしん之これを爲なし、其君民罪そのくんみんつみあるに非あらざるを以もつて、師しを興おこして討伐たうはつするに忍しのびず、諸路しよろに詔しよし、兵へいを嚴げんにして、自ら備そなふるのみ。

章惇復活

上かみ、始めて政まつりごとを親みづからす。侍郎じらう揚畏やうゐ、首しゆとして、呂大防りやたいほうに叛そむき、自ら謂いふ。迹あとは元祐げんいうと雖なも、心こころは熙豐きほうに在あり。入對にふたいして、章惇しやうてんを召まさむことを乞こふ。明年めいねん、紹聖せうせいと改元たいげんす。大防たいほう、罷おとむ。惇てん、右僕射うゑくやたり。純仁じゆんじん、罷おとむ。惇てんの來きるや、道みちにして陳瓘ちんくわんに遇あふ。惇てん、素もとより、其名そのなを聞きく、獨ひとりり、共ともに載のらむことを請こひ、訪とふに世務せいむを以もつてす。瓘くわん曰いはく、請こふ、乘のりる所の舟ふねを以もつて喻たととなさむ。偏重へんちゆうなれば、其れ行やるべけむや。或あるは左ひだりし或あるは右みぎす。其偏そのへんは一ひとなりと、惇てん、默然もくぜんたり。良よや久ひさしうして曰いはく、司馬光しはくわうの姦邪かんじや、當まさに先まづ辨べんすべき所ところなり。瓘くわん曰いはく、相公しやうこう、誤あやまれり。是れ猶なほ舟勢しゆうせいを平たいかにせむと欲ほして、左ひだりを移うつし以もつて右みぎに置おくなり。果はたして然しからば將まさに天下てんかの望のぞみを失うはむとす。

惇、既に至る。漸を以て、盡く熙豐の法を復し、元祐の人の罪を治
 する、盧日なし。司馬光、呂公著、王巖叟、趙瞻、韓維、孫固、范
 百祿、胡宗愈、司馬康等、既に死する者は、皆追貶して贈を奪ひ、
 呂大防、劉摯、蘇轍、梁燾、范純仁、劉奉世、韓維、王覲、韓川、
 孫升、呂陶、范純禮、趙君錫、馬默、顧臨、范純粹、孔武仲、王欽
 臣、呂希哲、呂希純、姚勛、吳安詩、王份、張耒、晁補之、黃庭
 堅、賈易、程頤、秦觀、朱光庭、孫覺、趙高、李之純、李固、蘇
 軾、范祖禹、劉安世、鄭俠等、皆しきりに貶竄せらる。文彥博、久
 しく致仕す、降して、太子太保となし、節鉞を罷む。皇后孟氏は、
 太皇太后の選聘する所なり。中宮に居ること五年にして廢す。章

惇、蔡卞、太皇太后を追廢せむことを請ふ。太后向氏、太妃朱氏の
 泣いて諫むるに頼つて、上、悟る。惇、卞、堅く施行を請ふ。上、
 怒つて曰く、卿等、朕が英宗の廟庭に入るを欲せざるかと。其奏を
 地に抵つ。

賢妃劉氏を立てて后となす。右正言鄒浩、冊禮を追停し、別に名
 族を選ばむことを乞ふ。詔して、浩は名を除き、勒停して新州に羈
 管す。浩、道に、其友田晝を過ぎ、別に臨んで涕を出す。晝、色を
 正しうして曰く、君をして、隱黙して京師に宦たらしむるも、寒疾
 に遇うて、汗せざれば、五日に死せむ。豈に獨り嶺海の外のみ、能
 く人を死せしめむや。願はくは、自ら沮む勿れ。士の當に爲すべき

所のもの、未だ此に止まらざるなりと。

元符三年、上崩す。在位十五年、改元するもの三。壽二十五。皇弟立つ。之を徽宗皇帝となす。

【徽宗皇帝】名は侁、神宗の第十一子なり。初め端王に封せらる。哲宗、崩す。欽聖憲肅皇太后向氏、幸執を召して、嗣を立てむことを議す。后、端王を立てむと欲す。章惇曰く、端王は浪子のみと。曾布、身長し。望み見れば、端王、既に簾下に在り。叱して曰く、章惇、太后の處分を聽けと。王、簾を出づ。惇、惶恐して措を失す。王、位に即く、太后に請うて、權に同じく軍國の事を處分せしむ。范純仁等、二十餘人、並に收斂せらる。龔夬、陳瓘、鄒浩、

臺諫となる。

韓忠彥、右僕射となる。琦の子なり。

文彥博、司馬光等、三十三人の官を追復す。

太后、簾を垂れて。半年にして、政を還す。

章惇、罷む。尋いで、竄せらる。

韓忠彥、曾布、左右僕射たり。

邢恕を貶す。

蔡京、蔡卞を貶す。卞は、安石の婿なり。之より先、臺諫陳瓘、

任伯雨等、卞を攻めて、其執政を罷む。京、翰林承旨となる。瓘、

其日を視て瞬せざるを見て謂ふ、この人、必ず大に貴からむ、然れ

人を射ば先
づ馬を射よ

十八史略卷之七

七〇

ども、其區區たる精神を以て、敢て太陽に抗す。他日志を得ば、必ず天下の患をなさむと。瓘、人に語つて曰く、人を射ば先づ馬を射よ、賊を擒にせば先づ王を擒にせよと。連疏して之を攻むること、甚だ力む。京、罷む。尋いで、又、御史陳次升等の言を以て、下と共に貶す。

上の意、専ら熙豐の政を紹述せむと欲す。而して、曾布は、徴しく、熙豐、元祐を兩存するの意あり。故に建中靖國の初、嘗て、略ぼ章惇、蔡卞の爲せし所を變ず。既にして、布、上の旨を迎ふ。正人任伯雨、江公望、陳瓘等、朝に容れられず、小人各黨ありと雖も、更迭出入、意向は同じく安石を祖とするのみ。

遼の道宗在
任四十六年
西紀自一一〇
五〇至一一一
〇女眞の阿骨
打立つ

遼主弘基、殂す。道宗と號す。孫延禧、立つ。天祚と號す。女眞の阿骨打立つ。女眞は、本名朱里眞、肅慎の遺種にして渤海の別族なり。或は曰く、本姓は挈、辰韓の後、三國に謂ゆる挈婁、元魏に謂ゆる勿吉、唐に謂ゆる黑水靺鞨なるもの、其地なりと。七十二の部落あり。もと相統べず、太中祥符より以後、絶えて中國と通せず。生女眞といふ者あり、其類猶ほ繁し。其會を巖版といふ。孫あり、楊哥太師といふ。遂に諸部に雄たり。或は曰く、楊割の先は新羅の人、完顔氏。女眞、之に妻はすに女を以てし、子二人を生む。長を胡來といひ、三人に傳へて、楊割に至る。阿骨打は、其子なりと。人と爲り、沈毅にして、大志あり。

宋—徽宗皇帝—

六一

建中靖國、一年にして、崇寧と改む。韓忠彥、罷む。再び司馬光等の官を追奪し、元祐の黨人を籍す。

蔡京相とな
り太師とな
る

會布、罷む。蔡京、相となり。蔡卞、政を執る。再び元祐の人を貶竄し、姦黨の碑を立つ。京、崇寧に僕射となつてより、大觀、政和、重和を歴て、太師となる。嘗て、暫く罷められしも、輒ち復た入り、罷めらるるの日と雖も、實に國命を執る。其間、趙挺之、張商英、相となり、嘗て、京と異なり。然れども位に在ること、各數月に過ぎず、或は一年にして罷む。何執中、鄭居中、劉正夫、余深の如きは、相位に在ること、或は久しく、或は淺く、居中、亦た京と異にして常に相排し、正夫亦た小異なりと雖も、然れども、京の權

教主道君皇
帝

寵に於て、損するなきなり。京の子攸の婦、宮禁に出入し、攸、遂に大に用ゐられ、父子權勢自ら相軋るに至る。上、攸を寵して、京の子弟親戚を尊び、滿朝、皆、其父子の黨なり。京、邪説を倡ふ、以爲へらく、豐亨豫大の運に當ると、専ら奢侈を以て、上に勸め、土木の功を窮極し、京城を廣め、大内を修め、盛に内苑を廣め、九鼎を鑄、鼎成るや、九州の水土を以て鼎中に納る。北方の寶鼎を奉安するに及びて、忽ち、水、外に漏る。大晟樂を作る。玉清神霄宮を作り、道士林靈素を崇信し、上を策して教主道君皇帝となし、延福宮を作り、保和殿を作り、萬歲山を作り、朱勛を以て、花石綱を領せしむ。奇花異木怪石珍禽奇獸、遠く致さざるなく、民間の一花

評 蔡京臘月
の雷を指し
雪瑞と稱し
て皆賀せし
して表賀せ
しむるの條
秦の趙高が
鹿を指して

馬と云はし
めしと一般
愚政の極と
いふべし
女眞の阿骨
打帝と稱し
す國を金と號

一木の妙、輒ち上供せしめ、一花、數千緡を費し、一石、數萬緡を費すものもあり。二十年間、山林高深、麋鹿群を成す。良嶽と改名す。又、村居野店酒肆青帘を其間に作り、毎歲冬至の後、即ち燈を放ち、縦に飲博せしめ、之を先づ元宵を賞すといふ。時に、星芒屢ば見はれ、地震ひ、河決し、怪異迭に出で、率ね以て常となす。京等誣奏す。甘露降り、祥雲現はれ、飛鶴空を蔽ひ、竹に紫花を生じ、芝草、良嶽に産し、及び諸州連理の木、雙花の芙渠、芍藥牡丹ありと。臘月の雷、三月の雪を指して、皆、瑞と稱して表賀するに至る。内侍童貫、梁師成、事を用ゆ。師成、専ら應奉を務め、以て上の

心を盡し、勢熾熏灼し、威福を中に竊む。童貫、専ら邊を開くを務め、事を外に生ず。皆、蔡京父子と相表裏す。女眞の阿骨打、重和元年戊戌を以て、帝と稱す。初め、遼の天祚、刑賞僭濫、禽色に荒み、歲毎に、名鷹海東青を女眞に索む。女眞、其隣東北の五國と戦闘し、乃ち能く此禽を獲て、以て獻じ、其擾に勝へず。阿骨打、遂に叛き、混同江東の寧江州を陥る。遼、將を遣し、之を討つ。敗る。中京、上京、長春、西遼、四路の兵を起して、並に進む。獨り涑流河の一路、深く入つて大敗し、三路、皆、退く。女眞、悉く遼の東海を虜にす。熟女眞の鐵騎益す衆し。天祚、親征して、復た大に敗る。女眞、勝に乗じて、渤海、遼陽、

五十四州を并せ、又遼西に度つて、五州を降す。阿骨打、遂に號を建てて晏と改名し、國を大金と號す。明年、遼の上京を破る。

高麗、來つて、醫を求む。上、二醫を遣して、行かしむ。還つて奏す、實は醫を求むるに非ず、乃ち、彼、中國將に女真と契丹を圖らむとするを知り、謂ふ、苟くも、契丹を存すれば、猶ほ中國の爲に邊を捍ぐに足らむ、女真是狼虎、交るべからず、宜しく、早く之が備をなすべしと。上、之を聞いて樂まず。

上、嘗て都市酒肆妓館に微行す。正字曹輔、上言し、彬州に編管せらる。

童貫、崇寧の間より、王韶の子と兵を領して、湟州を復し、責に

邊事を措置するに任ず。既にして、鄯州、廓州を復す。貫、遂に節を建てて宣撫となり、既に志を西邊に得るや、遂に謂ふ、北邊も亦た圖るべしと。政和の初、乃ち自ら請うて、使を奉じて、遼國を覘ふ。燕人馬植といふ者あり、燕を滅すの策を陳す。貫、挾んで以て歸り、姓名を趙良嗣と改む。燕を復するの議、遂に起る。政和の末、漢人海に浮んで來るあり、具に女真、遼を攻むる事を言ふ。重和の春、乃ち蔡京、童貫の議を用ゐて、馬政を遣し、海道より阿骨打の居る所、阿芝川、涑流河に至らしめ、與に、共に、遼を攻めむことを議す。阿骨打、遂に使を遣して來らしむ。宣和の初、京に至る。京、貫に詔して、夾攻燕を取るの意を以てし、軍校呼慶を差し

て、其使を送らしめ、海道より國に歸る。この歳、王黼相となり、力めて遼を攻むるの策を賛す。及び呼慶、復た金使と共に來る。時に、阿骨打上京に在り。遂に良嗣を遣して往かしめ、約すらく、金國は遼の中京を取り、本朝は燕京を取らむ。歳幣は遼に與ふるの數の如くせむと。良嗣曰く、燕京一帶は、西京を併せて是れなりと。金主、亦た之を許し、札を以て良嗣に付し、期するに、女眞の兵は平地松林より古北に趣き、南兵は白溝より夾攻するを以てす。良嗣歸る。馬政、復た子擴と共に、國書を持し、往いて、彼此の兵、關を過ぐるを得ざるを訂す。未だ幾ならずして、金使、復た來る。又國書を以て、就いて、其使に付して國に歸らしむ。時に、淮南、

山東の宋江
招安に就く

京西、河北、江南、相繼いで、盜起る。山東の宋江、方に招安に就く。睦寇方臘、しきりに、浙軍を陥れ、中都爲に震ふ。童貫、始めて、方臘を平らげて、北事作る。金人、師を悉くして、遼を渡り、中京に趨いて之を攻め陥る。中京は、故の奚國なり。遂に兵を引いて、松亭關に至り、宋と各關を過ぎざるの約あるを以て止まり、兵を引いて、其西よりして過ぐ。遼主、さきに已に引いて避く。或は言ふ、金の前鋒、將に至らむとすと。遼主、震驚して、亟に雲中に奔り、夾山に入る。時に、燕王淳、燕を守る。蕭韓、淳を立てて主となす。宋の童貫、蔡攸、師を帥ゐて、東路は白溝に至り、西路は范村に至る。蕭韓、迎へ戦

つて、甚だ力む。宋師、敗れて退く。耶律淳、死す。宋師、再舉す。遼の涿州の將郭藥師、常勝軍を領して、來り降る。宋兵五十萬、進んで、盧溝河に駐まる。蕭韓、之を拒ぐ。藥師、閒道より燕を襲ふ。幹、還り救うて死闘し、藥師、屢ば敗れ、わづかに身を以て、免れて、遁れ還り、盧溝の師、遂に潰ゆ。貫、攸、功なくして、罪を獲むことを懼る。時に、金主、奉聖州に在り、乃ち客を遣はして金主に之を圖るを禱む。金主、三道に分つて兵を進め、遂に居庸關に入る。燕、金に降る。金使、來つて言ふ、燕京は、金兵を以て攻下す。其地は宋に與へ、租税は、當に以て金に輸すべしと。宋使趙良嗣、往いて之を議し、歲幣を許すこと、契丹の如くし、舊

數の外、更に百萬を以て租税に代へて、併せて雲中の地を求む。金人、わづかに燕京、涿、易、檀、順、景、薊の六州を以て、來り歸す。貫、攸、燕に入る。燕の金帛子女職官民戸は、金人席卷して東す。得る所は、空城のみ。貫、攸歸り、王安中を以て燕山府に知たらしめ、詹度、郭藥師、同知たり。

星あり、月の如く、徐徐として南行して落つ。光、人物を照し、月と異なるなし。

神保觀を修す。其神、都人、素より之を畏る。傾城の男女、土を負うて以て獻じ、名づけて、獻土といふ。又、鬼使を飾作し、土を納るるを催す者あり。上、亦た微服して、之を觀る。後數日、旨あ

つて禁ず。

京師、河東、陝西、地震ふ。宮中の殿門搖動して、且つ聲あり。蘭州の草木、没入し、山下の麥苗、乃ち山上に在り。

金國、城郭宮室なし、契丹の舊禮を用ゐ、結綵山に如いて倡樂をなし、鬪雞、擊鞠の戲、中國と同じ。但だ衆樂の後に於て、舞女數人を飾り、兩手に鏡を持たしめ、電母に類す。其國茫然、皆、芟舎して以て居る。是に至つて、方に大屋數千間を營して、盡く中國の爲す所に做ふ。

災異疊見す

兩京河浙の路、災異疊見す。都城に青菓を賣る男子あり、孕んで子を生む。又豐樂樓の酒保朱氏あり、其妻年五十、忽ち髭鬚を生ず、

長さ六七寸、宛として一男子なり。詔して、度して女道士となす。河北、山東、盜起る。連歲凶荒、民、榆皮を食ふ、野菜給せず、相食ふに至る。饑民並に起つて、盜をなす。張仙といふ者あり、衆十萬、張迪の衆五萬、高托山の衆三十萬、自餘二三萬の者、勝げて計るべからず。

阿骨打殂す

金主、帝と稱す。六月にして殂す。太祖大聖武元皇帝と號す。弟、吳乞買、立つ。晟と改名す。燕山の地、易州の西北は乃ち金坡關、昌平の西は乃ち居庸關、順州の北は乃ち古北關、景州の北は乃ち松亭關、平州の東は乃ち險關、險關の東は乃ち金人の來路なり。凡そこの數關は、天、蕃漢を限る。之を得れば、燕境保つべし。然れど

宋—徽宗皇帝—

も、關内の地、平、灤、營の三州は、後唐、契丹阿保機に陥れられしより、營、灤を以て平に隸して、平州路となす。燕を得て、平州を得ざれば、關内の地、蕃漢雜處して、燕、保ち難しとなす。遼の張毅、平州を守る。金、既に人を遣して毅を招く。毅曰く、契丹、凡そ八路、今特だ平州存するのみ、敢て異志あらむやと。既にして平州を以て南附す。宋、遽に之を納る。趙良嗣、力めて争ふ、以爲へらく、必ず金兵を招かむと。金人、謀して知る。即ち平州を襲うて、之を破る。宋の詔札を得たり。之より曲を歸し、檄を累ね、毅を取らむとす。己むを得ずして、王安中に命じて、之を縊つて、其首を函送す。未だ幾ならずして、金の太子斡離不、既に平州路よ

契丹國を
九世
に二百十九年
立つて亡ぶ

り、將に燕に入らむとす。宋、方に且つ人を遣し、密に天祚を誘うて來り降らしめ、童貫を以て兩河燕山路を宣撫せしめ、將に天祚を迎へむとす。金人、方に退く。天祚、陰夾山に入らむとするも得べからず。是に至つて、衆を領して南に出づ、遂に金人に敗られて、擒に就く。契丹は、阿保機より天祚に至るまで、九世にして亡ぶ。時に宣和七年乙巳の歲なり。

この冬、金の斡離不、粘罕、道を分つて南す。斡離不、燕山を陥る。郭藥師之に降る。金兵、長驅して進む。郭藥師、爲に前驅す。童貫、太原より逃れ歸る。粘罕、太原を圍む。太原の帥張孝純、歎じて曰く、平時、童太師、多少の威重を作す、乃ち畏怯すること

此の如し。身、大臣となつて、難に死する能はず、何の面目あつて天下の士を見むと。孝純、冀景を以て關を守らしむ。知朔寧府孫翊來り救ふ。兵、二千に満たず、金人と城下に戦ふ。張孝純曰く、賊、既に近きに在り、敢て門を開かず。觀察、忠を盡して國に報ずべし。翊曰く、但だ恨らくは兵少きのみと。乃ち復た引いて戦ふ。金人大に阻む。再び兵を益す。力、敵する能はず。翊、死す。一騎の肯て降るなし。時に、王黼、先つこと一年、既に罷めらる。而して、白時中、李邦彥、並に相たり。皆、鄙夫なり。金兵來る。時中惟だ出奔の策を建つるのみ。上、内禪す。在位二十六年。改元するもの六、曰く建中靖國、曰く崇寧、大觀、政和、重和、宣和。太子

立つ、之を欽宗皇帝となす。

【欽宗皇帝】名は桓、東宮に在つて失徳なし。蔡京、童貫の輩、咸な之を憚り、動搖せむと欲するも、不可なり。是に至つて、位に即く。大學生陳東等、闕に伏して上書し、蔡京、童貫、王黼、梁師成、李彥、朱勔の六賊を誅して、以て天下に謝せむを乞ふ。彥は、民田を根括するを以て、百姓を破蕩し、怨を河北、京の東、西三路に結ぶものなり。勔は、花石綱を以て、所在騒動して、怨を東南に結ぶものなり。靖康元年、首として、黼、勔、彥を竄し、尋いで、皆、之を殺す。

狐あり、御榻に升つて坐す。詔して、狐王廟を毀たしむ。

李綱

上皇、應天府に奔る。

李綱を以て行營使となし、城守の策を定めしむ。

元祐の黨籍を除き、范仲淹、司馬光等に官を追贈す。

白時中、罷む。李邦彥、張邦昌、相となる。

春正月、韓離不、京師に抵る。之より先、朝廷、李邦彥を遣して、

和を求む。韓離不、鄴を携へて、以て京城を攻む。克たず。乃ち王

納を遣し、鄴と偕に來らしむ。邦彥等、皆和を主とす。惟だ綱は、

戦はむと欲す。上、邦彥の計を是とし、鄭望之を遣して、出でて使

せしむ。未だ至らずして、王納に遇ひ、與に俱に入つて見ゆ。又李

税を遣して、出でて使せしむ。税、又金使と偕に來る。金人、犒師

の金五百萬兩、銀五千萬兩、牛馬萬頭、表段百萬匹、中山、河間、

太原、三鎮の地二十餘郡を割くを求め、且つ宰相親王を質となさむ

と欲す。張邦昌をして、康王に副として、其營に如かしむ。金國

の太子、康王と同じく射る。連發三矢、皆、筈に中る。金人謂ふ、

是れ將家の子、親王に非ずと。歸らしめて、更めて、肅王を請うて

質となす。种師道等、諸路の勤王の兵至る。師道、奏す、京城は、

周回八十里、城の高さ數十丈、粟、數年を支ふ。宜しく、城内と寨

を割して拒守し、困を俟つて之れ撃つべしと。綱、亦た奏す、金、

孤軍を以て、深く入る、虎の檻に投ずるが如く、共に、一旦の力を

角すべからず、縦ち歸らしめて、之を撃たば、必勝の計ならむと。

宋一欽宗皇帝一

七九

評 和魔國を
誤る―汝が
議論定まる
の時を待て
ば我已に河
を渡るの譏
あらしむ

上、之を然りとす。而して、李邦彦、吳敏等、専ら和を主とす。議論一ならず。虜をして、汝が議論定まるの時を待てば、我、既に河を渡るの譏あらしむるを致す。未だ幾ならずして、統制官姚平仲、宵に金營を攻む。克たず。上、大に恐懼し、行營を廢し、李綱を罷め、以て金人に謝す。大學生陳東、及び都人數萬、闕に伏して、復た綱を用ゐむことを乞ふ。旨を得て、右丞に復し、守禦使に充つ。衆、乃ち散ず。金使、復た來る。乃ち三鎮を割くの詔書を以て、使を遣して、持して往かしむ。時に在京の金を括して、わづかに二十餘萬兩、銀四百餘萬兩を得たり。藏蓄、既に空し。金人、京城を圍むこと、凡そ三十三日、地を割くの詔を得、金幣數足るを俟たず

して退く。种師道、河に臨んで、之を要撃せむことを請ふ。綱、亦た以爲へらく、彼の兵六萬にして、我が勤王の師は二十餘萬、其半ば渡るを縱るして、之を撃たば、必ず勝たむと。邦彦等、従はず。惟だ三鎮に詔して、尙ほ堅守して割かざらしむ。

蔡京竄所に
死す

京師、圍を受くる時、梁師成、既に誅せらる。是に至つて、蔡京を儋州に竄す。潭に至つて死す。年八十。蔡攸萬安軍に竄せらる。尋いで、詔あり、所在に即いて之を斬る。童貫、亦た遠竄せられ、追うて、南雄に斬らる。

李邦彦、罷む。張邦昌、吳敏、並に相たり。邦昌、罷む。徐處仁、相たり。處仁、敏、罷む。唐恪、相たり。恪、罷む。何臬、相

宋―欽宗皇帝―

たり。

上皇、京師に歸る。數月にして、金兵復た至る。韓離不、東路より眞定を陥れ、長驅して先づ京師に抵る。粘罕、西路より、隆德、太原府、汾澤州、平定軍、平陽府、河南府、河陽府、鄭州、懷州を陥れ、京師に抵る。張叔夜等、兵を統べて、闕に赴く。唐恪、耿南仲、専ら和議を主とす。曰く、今、百姓困匱、數十萬を城下に養へば、何を以て、之に給せむと。乃ち各道の兵を止めて動くを得るなからしむ。京師は、十一月、圍を受けしより、凡そ四十日。卒郭京といふ者あり、言ふ、能く六甲の法を用ゐて、粘罕、韓離不を生擒せむと。盡く守禦の人をして、城を下らしめ、獨り、城樓の上

評
欽宗優柔
不斷和議に
迷ふて國遂
に亡ぶ

に坐し、親兵數百を以て、自ら衛る。俄頃にして、金人鼓譟して進む。京、衆を給いて曰く、須らく自ら城を下つて法を作すべしと。因つて、餘兵を引いて、南に遁る。虜兵、城に登る者、わづかに四人。衆、皆、披靡して大に潰ゆ。上、城の陥るを聞き、慟哭して曰く、朕、种師道の言を用ゐず、以て是に至ると。時に、師道、前一月に卒す。護駕の人、猶ほ萬餘あり、馬、亦た數千。張叔夜、連戦四日、其貴將一人を斬り、駕を護し、圍を突いて出でむと欲す。上、和議に惑うて定らず。士卒號哭して散ず。虜使劉晏、上に請うて城を出でしむ。都民、争ひ入り、櫛して之を食ふ。何桌、都民を率ゐて、巷戦せむと欲す。聞く者、争ひ奮ふ。金人、之に因つ

宋—欽宗皇帝—

て、兵を斂めて下らず。惟だ地を割き金幣を責め和議するを以て辭となし、以て戰守の計を誤らしむ。侍郎耿南仲、力めて、和を議するを主とす。上、以て然りとなし、遂に其計に墮つ。二元帥、上皇と相見むことを請ふ。上曰く、上皇、驚憂して、既に病む。朕、當に自ら往くべしと。遂に青城に如いて、之を見、二宿して返る。明年春、復た上に請うて、郊に出でしめ、續いて、逼つて、上皇を出さしむ。張叔夜、諫めて曰く、今上一たび出でて歸らず、陛下、再び往くべからず。臣、當に精兵を率勵し、駕を護して、以て出づべし。たとひ、虜騎追ひ至るも、臣決して、死戦せむ。或は僥倖すべし。若し、天、祚せざれば、封疆に死せむ。猶ほ、生きながら夷

金人宋の二
帝を以て北
に歸る

狄に陥らざらむかと。上皇、藥を飲まむと欲す。范瓊に奪はる。上皇に逼つて、宮を出でしむ。皇后、太子、親王、帝姬、皇族前後三千餘人、悉く軍前に赴く。城中の子女金帛寶玩車服器用圖書百物、括索して、公私上下、共に空し。然る後に、金主の詔書を宣して、異姓を選立し、遂に前太宰張邦昌を冊して、楚帝となし、宋の二帝を以て、北歸す。金人、汴に在ること、凡そ七閱月にして去る。初め、至る時、張叔夜、嘗て力戦す。餘は、皆、和を主とし、以て吳玠、莫儔、王時雍、徐秉哲、范瓊等に至るまで、往來して、上皇以下を逼逐して、郊に出でしめ、議して、異姓を擧ぐ。上の青城に在るに方つて、逼つて御服を易へしむ。時に、惟だ李若水、抱持し

評 亡國の状
景人をして
眼を覆はし
む

張叔夜と何
桌と皆食は
ずして死す

て大呼奮罵す。金人、刀を以て、其頤を裂き、其舌を斬つて、然る後に、之を梟す。相謂つて曰く、大遼破れし時、義に死する者十數。今、南朝、惟だ李侍郎一人のみと。然れども、一時憤死する者甚だ衆し。金人、知らざるなり。吳革、衆に結んで、二帝を劫還せむと欲す。范瓊に誘殺せらる。何桌、孫傳、張叔夜、秦檜、司馬朴、皆爭論して、趙氏を存立せむを乞ふ。金人、之を驅つて、上に従つて、北行せしむ。叔夜、粟を食はず、惟だ湯を飲み、界河を過ぎて死す。桌、燕に至り、亦た食はずして死す。京城危急の時に當つて、四方勤王の師、至る者、皆詔して、止まつて進まざらしめ、和議を妨げむことを恐る。金人の退くに訖るまで、未だ嘗て兵を交

へず。上、在位二年ならずして國破る。改元して、靖康といふ。弟康王、南京に立つ、之を高宗皇帝となす。

南 宋

【高宗皇帝】名は構、徽宗の第九子なり。母は韋氏。徽宗、吳越の武肅錢王、室に入るを夢み、既にして構を生む。康王に封せらる。靖康の初、嘗て出でて、幹離不の軍に使す。この冬、幹離不、再び來るや、詔を奉じて、再び出でて使す。耿南仲、偕に行きて、相州に至る。民、道を遮つて、往くことなきを請ひ、守臣宗澤、之を止む。相州の守、蠟書を以て言ふ、金人騎を遣して、康王の所在を

宋—欽宗皇帝—

南

宋—高宗皇帝—

物色すと。乃ち相州に回り、南仲と共に榜を掲げて、兵を召して勤王す。詔あり、康王を以て大元帥となし、汪伯彥、宗澤を副となし兵を領して、入つて衛らしむ。王、伯彥の議に従ひ北門を出でて、河を渡つて、大名に至る。京師陷るを聞く。澤、兵を進めて、京城に向はむを請ふ。伯彥、王に請ふ、兵を東平に移して、身を安地に措かむと。南仲、亦た以て然りとなす。遂に東に去る。知河間府黃潛善、亦た兵を領して至り、進んで濟州に屯して探報す、二帝北行し、張邦昌、金に立てられ、國を楚と號すと。この日風霾、日に薄暈あり、百官慘怛、邦昌亦た憂色あり、惟だ王時雍、范瓊等、欣然得るあるが如し。邦昌、位に在ること三十三日。御史馬紳、書

を邦昌に貽り、請ふ、速に行いて、正を改め、服を易へて歸省せよと。遂に元祐孟太后を迎へて政を聽かしむ。太后、康王を迎立す。詔して、中外に告ぐ、曰ふあり、漢家の厄十世、光武の中興に宜しく、獻公の子九人、惟だ重耳尙ほ在りと。使を遣し、表を奉じ、及び孟後の詔を以て來る。邦昌、繼いで至り、地に伏し、慟哭して死を請ふ。使臣、河北より竄げ來り、道君の手札を進む。曰く、便ち眞に即いて、來つて、父母を救ふべしと。王、慟哭して拜受し、遂に應天府に趨いて、位に即き、元を建炎と改む。和を主とし國を誤るを以て、耿南仲を罷竄し、李綱を召して相となし、宗澤を以て開封に知として留守となす。綱、至る、邊防軍政、略ぼ緒あり。而し

評
南宋興復
の内難の
爲めに挫
折の事なき
惜むべき
なり

て、潜善、伯彦、復た和を主とし、亟に祈請使を遣す。綱、相たること、數十日にして罷め、潜善、伯彦、相となり、首として、上書の人、陳東、歐陽徹を殺し、策を決して、東南に幸し、復た兩河を經制するの意なし。この冬、車駕、遂に揚州に至る。金人、三道に岐れて、南に来る。二年春、金人、汴に至り、宗澤に敗らる。澤、群盜を招撫し、四方の義士を募り、百餘萬を合し、糧半歳を支ふ。表疏、數十を連ね、上に請うて、汴に還らしむ。潜善、其成功を忌んで、中より之を沮む。憂憤、疽、背に發して没す。終に臨んで、一語の家事に及ぶなく、惟だ河を過ぎむと連呼するもの三たび、都人之が爲に號慟し、聞く者、皆、相弔うて、涕を出す。

張浚

三年春。金人將に揚州に至らむとす。上、報を得て亟に出づ。二相、方に堂に會食す。吏呼んで曰く、駕行くと。乃ち戎服して南走す。揚州を回望すれば、烟焰、既に天に漲る。呂頤浩、張浚、上に瓜州に追及し、小舟を得て、以て渡り、鎮江に至り、遂に杭州に如く。潜善、伯彦を罷め、朱勝非を以て相となす。御營の將、苗傅、劉正彦、亂を作し、上に請うて、位を皇子尊に禪らしむ、未だ三歳ならず。孟太后、政を聽く、呂頤浩、張浚、師を帥ゐて、勤王す。韓世忠、前軍たり、張俊、之を翼く。劉光世、遊撃して殿となる。勝非、二兇に説いて、亟に反正せしめ、孟后を尊んで、隆祐皇太后となす。勝非、罷む。呂頤浩、相となる。二兇、走る。世忠、之を

張俊

追ひ、皆誅に伏す。上、建康に如く。俊を以て、川陝宣撫處置使となす。隆祐太后、南昌に如く。兀朮が粘罕に請うて、將に江浙を犯さむとするが故なり。杜充、右僕射となり、建康を守る。上、杭州に如く。杭を昇せて臨安府となす。臨安より浙東に如く。金人、兩道に分れ、一軍は、蕲黃より江を渡る。劉光世、江州に在り、以爲らく蕲黃の小盜なりと、王徳を遣して、之を興國軍に拒がしめ、始めて、金人たるを知る。金人、大冶より洪撫、建昌、臨江、吉州に趨き、隆祐太后を追ひて及ばず。遂に袁潭、荆南、澧州を陥れ、乃ち石首より北に渡つて去る。一軍は、滁和より江東の馬家渡に向ひ、江を濟つて、建康を陥る。杜充及び守臣、皆、兀朮に降る。通判楊邦父從

はず、血を刺して裾に書して曰く、寧ろ趙氏の鬼となるも、他邦の臣とならずと。衆、擁して、兀朮に見えしめ、誘諭累日、輒ち叱罵し、卒に大に罵つて殺さる。兀朮、長驅して、杭州を陥る。上、去つて、既に七日。兀朮、進んで、越州を陥る。四年春、明州を陥る。時に、上、既に台州章安鎮に次す。金人、船を以て、昌國縣を犯し、追うて、上の舟を襲はむと欲す。提領海舟張公祐、大船を率いて、之を撃散す。乃ち退く。兵を回して、秀平江、常州を陥れ、鎮江に至る。韓世忠、之を邀へ、海舟を以て與に戦ふこと數十合、俘獲多し。卒を金山龍王廟に伏せて、幾んど、兀朮を獲むとす。黄天蕩に相持す。兀朮、道を假らむことを求め、甚だ恭し。許さず。

岳飛

建康より北歸せむと欲す。去るを得ず。或ひと教へて、冶城西南隅の蘆場の地に於て、大渠を鑿たしめ、一夕にして成る。次早、舟を出して、建康に趨く。世忠、大に驚いて、之を尾撃す。一日、風なきに値うて、海舟動く能はず。兀朮、乃ち其舟を率ゐて、江を出でて北に去る。疾きこと、飛ぶが如く、火箭を以て海舟を射る。世忠、軍亂れて奔り還る。兀朮、乃ち北に遁るるを得たり。統制岳飛、逸へ撃つて、之を六合に敗る。

初め、張浚、西行す。上、浚に命じ、三年にして後に、師を用ゐしむ。是に至つて、撻辣、兀朮、皆、淮東に在り。浚聞、兀朮躊躇するも、必ず再び東南を犯さむとすと。議して、師を出し、攻

取して以て其勢を分たむとす。士大夫及び諸將、皆以て不可となす。浚、策を決し、檄を粘罕に移して、罪を問ひ、吳玠を遣して、長安に入らしむ。金人、遂に兀朮を調し、京西より星馳して、陝西に赴き、婁室と合す。浚、六路の兵を合して、富平に至る。婁室、兵を擁して、驟に至る。鐵騎、直に環慶路趙哲の軍を撃つ。佗路、援けず。哲、所部を離る。諸軍退く。金遂に勝に乗じて前む。浚、趙哲を斬る。諸路の兵、皆散じ去る。陝西大に震ふ。浚、軍を興州に駐め、劉子羽を遣して、諸將の在る所を訪はしめ、各、所部を引いて、來會せしむ。人心粗ば安し。吳玠、走つて、大散關東の和尚原を保つ。

秦檜二心

上、海道より、回つて越州に駐まる。呂頤浩、罷む。范宗尹、相となる。秦檜、南に歸つて、行在に赴く。檜、北に在り、撻辣に依つて任用せられ、撻辣の南侵するや、檜其軍に參謀たり。嘗て、爲に檄を草し、山東の州郡を下す。全家を挈へ、小舟を浮べて、漣水軍に抵る。自ら逃れ歸るといふも、朝士多く之を疑ふ。檜言ふ、天下の無事を欲せば、須らく是れ、南は自ら南、北は自ら北たるべしと。上に乞うて、書を撻辣に致し、以て好を求めしむ。其言は、皆、撻辣の意なり。

劉豫帝と稱す

この歳、劉豫、帝と稱す。豫は景州の人、建炎戊申に於て、濟南の守を以て金に降り、之が用をなし、東平府に知たるを得、兼ねて

河南に節制たり。粘罕、金主に白し、邦昌の故事に循つて、豫を立て、國を大齊と號し、後に都を汴に遷す。粘罕、既に關中の地を得、悉く割いて以て豫に與ふ。

紹興元年、張俊に命じて、江淮の盜李成を討たしむ。成、江淮の六七州に據り、兵數萬を連ね、東南を席卷するの勢あり。尋いで江筠、臨江を陥る。後、其軍を撃つて、三郡を復す。成、遁れて齊に降る。

張浚、盡く陝西の地を失ひ、惟だ階、成、岷、鳳、洮の五郡、及び鳳翔府の和尚原、隴州の方山原を餘すのみ。浚、退いて圓州を保す。統制曲端、威名あり。浚、さきに譖を用ゐて其兵柄を罷め、

萬州ばんしゅうに安置あんちす。西人せいじん、端たんに倚よつて、重おもきをなす。貶へんせらるるに及びて、軍情ぐんじやう悦よろこばず。是こゝに至いたつて、又また、恭州きやうしゅうの獄ごくに送おくつて之これを殺ころす。士大夫しだふ軍民ぐんみん、皆みな悵悵やうやうす。西人せいじん益ますます是こゝを以もつて、浚しゆんを非ひとす。金人きんじん、兩道りやうだうに分わかれて、蜀しよくに向むかふ。吳玠ごかい、弟おとうと璘りんと大おほに之これを和尚原わしやうげんに敗やぶり、又また將えらを選えらんで、之これを箭せん筈くわつ關くわんに敗やぶる。兩道りやうだう、皆みな、入いる能よはず。

范宗尹はんそうゐん、罷はめらる。秦檜しんくわい、昌言しやうげんして曰いはく、我われに二策にさくあり、以もつて天下てんかを聳動しやうどうすべしと。遂つひに右相いうしやうとなり、呂頤浩りよいかう、左相ささうとなる。兀朮こつじゆつ、諸道しよだう及び女眞じよしんの兵へいを會あして、浮梁ふれうを寶雞縣ほうけいけんに造つくり、渭ゐを渡わたつて、和尚原わしやうげんを攻せむ。玠かい、璘りん、三日さんじつ、三十餘戰さんじゆせん、大おほに之これを破やぶる。兀朮こつじゆつ、流矢りうしに中あたり、わづかに身みを以もつて免まぬれ、始はめて、河東かとうより燕山えんざんに歸かへる。

紹興三年せうこうねん。上かみ、越州えつしゅうより臨安りんあんに還かへる。言者げんしや、秦檜しんくわい、專せんら和議わぎを主しゆとして、恢復くわいふくの遠圖えんとを沮止そしするを劾がくす。檜くわい、罷はむ。朱勝非しゆしやうひ、右相いうしやうとなる。

紹興三年せうこうねん。春はる、金きんの撒離曷さんりかつ、鳳翔ほうしやう、長安ちやんあんより東あづまに去いると聲言せいげんし、實じつは商於しやうおより漢陰かんいんに出いで、直たせちに金商きんしやうに趣おもむく。吳玠ごかい、急きふに兵へいを率しゆゐて之これを饒風嶺じやうふうれいに扼やくす。金人きんじん、閒道かんだうより、遠めくつて其後そのうしろに出いづ。玠かい、遽にはかに仙人關せんじんくわんに還かへる。金人きんじん、遂つひに進いんで興元こうげんを陷おとしる。知府ちふ劉子羽りうしゆ、退しりぞいて、三泉縣さんせんけん、潭毒山たんどくざんを保たもつ。撒離曷さんりかつ、食盡しよくつく、乃すなはち引ひいて還かへる。吳

璘、糧なきを以て、塞を拔き、和尚原を棄つ。金人、之を得たり。玠、其必ず深く入るを度り、乃ち兵を嚴にして、以て待つ。兀朮、果して、撒離曷と共に、來つて仙人關を犯す。玠、璘、共に戰ふ。と七日、金人支ふる能はず、宵に遁る。玠、伏を設けて、其歸路を扼し、又之を敗る。この擧、金人、意を決して、蜀に入らむとす。卒に志を得ず。この歳、浚、又、洮岷關外を失ひ、惟だ階成秦鳳を存するのみ。浚、召し還され、尋いで、劉子羽と共に、皆貶竄せらる。浚の是行、もと關陝より、中原を取らむと欲し、乃ち盡く關陝を喪うて歸り、頼に玠璘を得て蜀を保するのみ。

齊、李成を遣し、攻めて、鄧、襄、隨、郢、唐州、信陽軍等を陷

る。岳飛、隨、郢を復す。成、襄陽を棄てて遁る。

呂頤浩、朱勝非、相繼いで罷められ、趙鼎、右相となる。

齊、金兵を以て、道を分つて南侵す。上、詔して親征し、出でて平江に如く。張浚を以て、樞密院に知たらしむ。之より先、浚、北方既に西顧の憂なく、必ず力を併せて東南を窺はむことを極言す。上、其言を思つて、遂に之を召す。浚、至り、請うて、岳飛を遣して、江を渡つて淮西に入らしめ、以て北兵の淮東に在る者を牽制せむとす。之に従ふ。上、浚に命じて、師を江上に視しむ。將士、浚の來るを見て、勇氣皆倍す。時に、韓世忠、揚州に停まり、さきすでに大に金兵を大儀鎮に敗り、其將撻也を擒にし、解元、成閔、共

に承州しょうしゅうに戦たたかひ、十三捷せふす。仇念孫暉きゆうえんそんけいは之を壽春じゆうしゆんに敗り、王徳わうとくは之を滁州ちゆうしゅうに敗り、岳飛がくひは牛阜等ぎゆうふとうらを遣して、之を廬州ろしゅうに攻めしむ。捷辣兀たつちやくこつ尤じゆうつ、世忠せいしゆうに扼やくせられて、江の渡るべからざるを知つて、引いて還かへる。齊せいの劉麟りゅうりん、劉猷りゅうげい、輜重しちゆうを棄すてて遁のがれ去る。紹興五年せうこうねん。上へいこう、平江へいこうより臨安りんあんに還る。趙鼎てうてい、張浚ちやうしゆん、左右の相しやうたり。浚しゆん、兼ねて、諸所の軍馬ぐんばを都督ととくす。尋いで、復た浚しゆんに命じて、師を江上に視しむ。浚しゆん、鎮江ちんこうに至り、韓世忠かんせいしゆうを召し、兵を擧げて、移つて楚州そしゅうに屯せしむ。浚しゆん、建康けんかうに至り、張俊の軍を撫し、太平州たいへいしゅうに至つて、劉光世の軍を撫す。踊躍ようやくして奮ふんを思はざるなし。岳飛がくひを以て、河北京西招討使かほくけいせいせうたうしとなす。

之より先、建炎庚戌中、武陵の人鍾相しゆうしやうといふ者あり、鼎州ていしゅうに起り、僭せんして、楚そと號がうす。鼎てい、澧れい、潭たん、辰しん、岳がくの境きやう、皆みな、盜區たうくなり。相しやう、敗れて擒きんに就つく。其徒そのとに揚やうと云ふ者あり、洞庭どうていに據り、遂に劇寇げきかうをなす。官軍、陸より之を襲へば湖に入り、水より之を攻むれば岸きしに登のぼる。曰く、能く我を害するあらば除だ是れ飛來ひらいのみと。浚しゆん謂ふ、上流じやうりゆう先づ去らざれば、云、腹心はくしんの害をなし、將まさに以て國を立つるなからむとすと。請うて、自ら行く。浚しゆん、湖南こなんに至り、岳飛がくひの兵、至るに會し、急きふに其水寨そのすゐさいを攻む、云窮蹙きゆうしやく、水に赴おもむいて死す。遂に平らぐ。浚しゆん、湖南より轉じて、兩淮りやうわいに由り諸將しよしやうを會し、防秋ほうしゆうを議し、乃ち入つて見ゆ。

蒙國金に叛

金主晟、殂す。文烈と諡す。初め、旻、晟と約す、兄終はれば弟立ち、然る後に、旻の子に復歸せむと。故に、晟、己の子宗盤を捨てて、旻の長孫曷囉馬を立てて諳版孛極烈となす。儲副の位なり。曷囉馬、名は亶、是に至つて、遂に位に即く。宗盤、旻の別子及び粘罕と、皆立つを争うて得ず。粘罕、時に己に兵柄を失し、悟室と並に相たり。粘罕、食を絶ち、縦飲して死す。蒙國、金に叛く、蒙は、女眞の北に在り、唐に在つては、蒙兀部たり、亦た蒙骨斯と號す。

紹興六年、張浚、復た出でて、師を視る。上、臨安より平江に如く。齊人、道を分つて入寇す。初め、劉豫、粘罕に因つて、立つを

得、粘罕を奉ずるを知るのみ、他帥を蔑視す。是に及びて、兵を金に請ふ。宗盤、之を沮み、豫が自ら行くを聽るし、然も、兀朮を遣し、兵を黎陽に提げて、以て釁を觀せしむ。劉光世、時に廬州に駐まる。以爲へらく、守り難しと。張俊、泗州に駐まり、亦た兵を益すを請ふ。衆情洶懼す。張浚、書を以て、俊及び光世を戒め、進撃あつて退保なからしむ。趙鼎等、上に請うて、親書して、浚に付し、師を退けて南に還り、江を保たむと欲す。浚、力争す、以爲へらく、必勝を保すべし、一たび退けば大事去らむと。光世、既に廬州を捨てて退く。浚、即ち星馳して、采石に至り、人を遣して、其衆を諭さしめ、若し一人の江を渡るあらば、即ち斬つて以て徇へむ

評 子北宋の天
りて虜とな
終る敵地に
悲しむ

といひ、仍つて光世を督し、復た廬州に還らしむ。光世、己むを得ず、乃ち兵を駐め、王徳、鄺瓊を遣し、三たび齊兵を霍丘、正陽及び前羊市に敗る。時に劉猷、淮東に至り、韓世忠の兵に阻まれて敢て進まず、乃ち淮西より渡る。浚、張俊の統制官楊沂中を遣して、濠州に至らしめ、俊と兵を合す。沂中、猷の前鋒を敗る。猷、兵を引いて、劉麟に合肥に會して後に進まむと欲す。沂中共に藕塘に遇うて合戦す。猷、大に敗る。麟、猷の敗を聞き、風を望んで潰え去る。光世、勝に乗じて、追ひ襲うて、亦た捷つ。北方、大に恐る。上曰く、敵に克つの功、皆、右相より出づと。趙鼎遂に罷む。上皇、五年四月を以て歿し、七年に至つて、凶問、始めて至る。

評 宿將功を
争ふ亡國の
兆也

壽五十四。二帝、建炎の初より、燕山より中京に如く。古しへの奚國霫郡なり。燕山の北千里に在り。次年、又中京より韓州に移る。中京の東北千五百里に在り。後二年、又韓州より五國城に移る。金國都する所の東北千里に在り。上皇終る。岳飛、湖北京西宣撫使となる。時に淮東宣撫使韓世忠、江東宣撫使張俊、皆、久しく、既に功を立つ。而して、飛は列將を以て拔起す。世忠、俊、不平なり。飛、己を屈して、之に下る。二人皆、答へず。飛が楊么を破るに及び、俊、益す之を忌む。是に於て、嫌隙日に深し。上、自ら平江に如き、建康に如く。飛、因つて、駕に扈して、以て行き、入つて見え、疏して恢復を論ず。秦檜、時に樞密

副使たり、和議を主とし、飛の成功を忌んで、之を沮む。飛、内艱を以て去る。上、力めて、之を起す。劉光世、言者、其師を退け、幾んど事を誤るを論ずるを以て、兵柄を罷む。張浚、王徳を以て其軍を統べしむ。徳、酈瓊と等夷にして相下らず、大に諛いで、督府に詣つて、徳を訴ふ。浚、乃ち徳を召して還らしめ、督府都統制となし、而して、呂祉を以て督府參謀となし、其軍を領せしむ。祉、簡倨にして、將士の情に通せず。瓊等の反側を聞き、密に之を罷めむを乞ふ。瓊、叛き、祉を執へ、所部數萬を以て齊に降る。張浚、遂に言を以て罷む。浚の徳と祉とを用ゆる、岳飛、嘗て、其不可を言ふ、浚、聽かず、故に破る。趙鼎、復た相たり。

金人、劉豫の國を立つる能はざるを以て、之を廢す。齊、立つこと、八歳にして亡ぶ。

紹興八年。上、建康より臨安に還る。秦檜、復た相たり。趙鼎罷む。詔して講和を議す。建炎より以來、歳として、使を遣して直に尊號を去り。其正朔を奉じ、藩臣に比するを願はざるなし。金人從はず。使者往くも、多く拘囚せらる。後、數ば南侵すれども、利あらず。江南の圖るべからざるを知り、然る後に、檜を遣して、閒を爲さしむ。豫が廢せらるるに至つて、和議乃ち決す。金使張通古來る。編修官胡銓、上疏す。以爲へらく、陛下、一度膝を屈すれば、祖宗廟社の靈、盡く夷狄に汚され、祖宗の赤子は盡く左衽となり、

評
 胡銓(坦) 上疏(措) 痛烈(懦) 辭(夫) 起(た) した(む)

朝廷の宰執、皆、陪臣とならむ。異時豺狼厭くなき、安んぞ、我に加ふるに無禮を以てする、劉豫の如くならざるを知らむ。夫れ、三尺の童子は、無知なるも、犬豕を指して拜せしむれば、佛然として怒らむ。堂々たる天朝、相率ゐて、犬豕を拜せば、嘗て童稚の羞なからむや。奉使王倫、北使を誘致し、江南を招諭するを以て、名となし、我を臣妾にせむと欲す。執政孫近、秦檜に附會す。臣、義として檜等と共に天を戴かず。乞ふ、倫、檜、近、三人の頭を斬り、之を藁街に竿し、然る後に其使を羈し、無禮を責めて問罪の師を興さむ。三軍の士、戦はずして、氣、自ら倍せむ。然らざれば、臣、東海を蹈んで死するあらむのみ。寧んぞ、能く小朝廷に處つて活を

求めむやと。書上る。しきりに貶竄せらる。

紹興九年。金人、先づ陝西、河南の地を以て、宋に歸す。朝廷、官を遣し、陵寢に謁し、地界を交し、汴京留守を除す。

青澗城の李世輔、來り歸す。世輔の先は累世蕃族都巡檢使たり。

父子、嘗て、齊に仕ふと雖も、毎に相泣いて、宋に歸するを得ざるを恨む。齊、世輔を用ゐて、同州に知たらしむ。嘗て、閒を得て撒離曷を生擒して朝に歸せむと欲す。金兵、來り追ふ。之を縱つて、西夏に奔らしむ。其父母及び二子一孫、皆戮せらる。是に至つて、兵を夏に乞ひ、以て復る。既に出でて、陝西、既に宋に還りしを知り、乃ち夏兵を部して來る。上、慰勞して賜賚を加へ、名を顯忠と

賜ふ。

金國、謀反の者あり。事、宗盤等に連る。皆、坐して誅せらる。左副元帥撻辣は、實に楊割の長子なり、金主亶の大父行なり。粘罕の死せしより、宗戚大臣、皆懼る。撻辣、悟室と共に、尋いで亦た謀叛を以て、先後して誅せらる。金、宋と和するは、實に撻辣之主とす。撻辣、既に死す。是に於て、右副元帥兀朮、左相たり。乃ち密に其主に奏するに。宋、未だ歲貢正朔誓表冊命を議せず、然も、撻辣、擅に地を割くを許すを以てす。遂に盟を渝ふ。

紹興十年。金兵四道に分れて、南侵す。劉錡、大に兀朮を順昌府に破る。檜、急に上に啓して、錡を召し還さしむ。岳飛、大に之

評
秦檜の反
間毒惡人理
を絶す而し

て高宗尙之
を排する能
はず人をし
て切齒せし
む

を郾城に敗り、幾んど兀朮を擒にせむとす。飛、朱仙鎮に至る。檜、急に上に啓して、飛を召し還さしむ。韓世忠、金人を淮陽の洶口に敗る。兀朮、汴に還り、兩河の軍と蕃部とを檢し、以て再舉を謀る。

十一年。兀朮、廬州を陥れ、和州を侵す。劉錡、楊沂中、之を棗阜に敗る。檜、又上に啓して、亟に師を班さしむ。沂中、瓜州渡より行在に返る。張俊、宣化より建康に歸る。劉錡、采石より太平州に歸る。宣撫司を罷め、其兵を以て、御前に隸す。師を出す時に遇へば、臨時、旨を取る。韓世忠、張俊を以て樞密使となし、岳飛、副使たり。飛、世忠、尋いで罷む。兀朮、書を以て、檜に抵して曰

評 岳飛は南
 宋第一の
 將、其言
 後、人其
 頗る多し
 今、悉く
 難、所、
 其、所作
 紅、一、
 舉、怒、
 一、髮、
 凭、欄、
 雨、歇、
 眼、仰、
 嘯、三、
 名、塵、
 八、千、
 和、月、
 閑、白、
 年、頭、
 切、靖、
 康、空、
 恥、悲、

く、爾朝夕和を以て請ふ、然るに、岳飛方に河北の圖をなす、必ず
 飛を殺せば、乃ち可ならむと。張俊、又飛の罪を構成し、逮して獄
 に赴かしむ。檜、奏して、飛及び張憲、岳雲を誅して、和議遂に諧
 ひ、韋太后及び徽宗の梓宮を宋に歸す。金人惟だ盡く許す所の陝
 西、河南の地を悔ゆるのみならず、なほ唐鄧等の州を割いて金に入
 れしめ、淮の中流を盡して界となし、西、商秦の半を割き、和尚、
 方山の原を棄てしむ。時に、宣撫使吳玠、卒して四年、胡世將、之
 に代り、力めて和尚原等の地を以て棄つべからずとなす。兀朮、必
 ず之を欲す。遂に大散關を以て界となす。
 時に、金國、屢ば内叛あり、宗戚大臣、相繼いで誅夷せらる。且

猶未雪、何時
 子恨、駕長車、
 滅、破、
 踏、破、
 缺、胡、
 餐、胡、
 笑、談、
 奴、血、
 頭、血、
 山、河、
 關、河、

金主亮立つ
 西紀一、一
 二九

つ、北に蒙兀あり。自ら大蒙と號し、帝と稱し、元と改む。連歲兵
 を用ゆるも、卒に討つ能はずして之と和し。南侵又逞しうするを得
 ず。而して、宋の猛將精兵、方に日に盛なり。恢復實に難からず。
 秦檜に沮まる。有志の士、扼腕して歎息す。兀朮死せむとするや、
 曰く、南朝の軍勢、強きこと甚し、宜しく、益す和好を加へて、十
 數年を俟つべく、南軍衰老、然る後に、之を圖れと。張俊、趙鼎、
 皆、遠竄せられ、鼎、海外に卒す。當時、異議の人、貶竄殆んど盡
 き、復た敢て兵を言ふ者なし。
 紹興十九年、金主亮、其下に弑せられ、共に丞相岐王亮を立つ、
 旻の孫なり。

南 宋—高宗皇帝—

紹興二十年。金主亮、上京一隅に僻在するを以て燕京に城づき、徙つて之に居り、燕京析津府を改めて大興府となし、中都と號し、中京會寧府を以て北京となし、汴京開封府を以て南京となし、而して、舊の遼陽府を東京となし、大同府を西京となすこと故の如く、蕃漢の地を分つて十四路となし、總管府を置く。

二十五年。秦檜、卒す。檜、政を秉ること十八年、終に臨んで、猶ほ大獄を起し、己に異なる者を殺さむと欲す。張浚、李光、胡寅等五十三人。幸に檜病んで、既に書する能はずして、免るを得たり。沈該、万俟卨、湯思退、陳康伯、朱倬、相繼いで相となる。三十一年。欽宗の凶問至る。去年冬を以て、五國城に殂す、年六

評

秦檜は實國史の奸佞賣國の奴輩、遺史を讀み、遺史に堪へり、遺史に汚穢

評

金主亮の詩書合、混有別、江、南、封、湖、上、提、萬、西、山、第、立、馬、吳、詞、大、一、峰、吳、壯、想、雄、渾、豪、絶、大、空、の、概、あ、り、と、い、ふ、べ、し

十。

金主亮、汴京を修す。蓋し、南侵を經營すること幾年。嘗て、使の來るに因つて、密に畫工を藏し、臨安の山水城市宮室を圖繪して以て歸らしめ、詩を其上に題し、馬を立つ吳山の第一峯の句あり。この秋、徙つて汴に居り、遂に盟を渝へて兵を擧ぐ。其母、諫む。之を殺して、以て衆を威す。兵百萬と號す。淮西の諸郡を陥る。江淮西制置使劉錡、王權を遣して、敵を迎ふ。權、逗留す。既にして退き、還つて采石に奔る。報至る。中外大に震ひ、海に沈んで敵を避くるの議あり。陳康伯、可かず。葉義問に命じて師を視しむ。中書舍人虞允文、參謀軍事たり。金人、揚州を陥れて瓜州に趨く。

劉錡、將を遣して、之を阜角林に敗る。詔あり、錡をして、軍を還さしめ、専ら江上を防ぐ。金主、采石より渡らむと欲す。朝廷、李顯忠を以て、權に代らしむ。然も、未だ至らず。金人の舟來る。虞允文、亟に水軍を督し、海鯨船を以て、迎へ撃つて死闘す。金人渡る能はず。時に、亮、内變あるを聞き、又、舟師、海道より來る者は、既に、李寶に焚かれ、然も、荆鄂の諸軍、方に上流よりして下るを聞き、忿ること甚し。乃ち揚州に回り、諸將を召して約す、三日必ず濟らむ、期を過ぐれば、盡く殺さむと。諸將遂に亮を弑す。亮の引いて南するに方つて、渤海の一軍、叛き去る。既にして、葛王褻を遼陽に擁立し、亮の死を聞いて、遂に譙京に入り、亶を追證

して閔宗となし、亮を廢して海陵王となし、謚して煬といふ。褻は晟の孫なり。後に雍と改名す。之より先、數年、張浚、嘗て言ふ、金、必ず盟を渝へむと。時相湯思退等、大に愕いて、以て狂となす。是に至つて、浚、起つて建康に判たり。上、臨安より建康に如く。浚、迎へて謁す。衛士、其復た用ゐらるるを見て、手を以て額に加ふ。

三十二年。上、臨安に還る。金使來る。使を遣して、之に報せしめ、復た和議を尋ぬ。夏、六月上、内禪し、退いて德壽宮に居る。在位三十六年。改元するもの二、曰く、建炎、紹興。皇太子立つ、之を孝宗皇帝となす。

【孝宗皇帝】初名は伯琮、宗室追封は秀王諡は安僖、子偁の子、太祖七世の孫なり。母張氏、夢に、崔府君、一羊を擁して、來つて曰く、之を以て識となせと。高宗の康王たるや、出でて使して、磁州に至る。磁人夢む、崔府君出でて迎ふと。張氏、この歳、丁未を以て、伯琮を秀州に生む。嘉禾の瑞あり。小字は羊。高宗、太子勇を喪ひ、命じて、太祖の後を選ばしむ。伯琮を得て、宮中に鞠ひ、名を瑗と賜ふ。偶ま、崔府君と同じ。晉安郡王に封せらる。秦檜、其英明を疾むも、害する能はざるなり。竟に立つて、皇子となり、名を瑋と賜ひ、楚王に封せらる。紹興の末、名を昉と賜ふ。立てて、皇太子となし、尋いで、詔して位に即かしむ。上皇を尊奉して、光

堯壽聖皇帝といひ、皇后吳氏を壽聖太 上 皇后となす。史浩を以て右相となし、張浚、樞密使たり、師を淮に督し、遂に北伐す。浩、其議に與らず、力め丐うて罷む。李顯忠、濠州より出でて、靈壁に趨いて、金兵を敗る。邵宏淵、泗州より出でて、虹縣を圍み、金將を降し、進んで宿州に克つ。金の副元帥紇石烈志寧、兵を率ゐて至る。顯忠、共に戦ひ、連日決せず。謀、報ず、金人大に河南の兵を興して、將に至り會せむとすと。宏淵、顯忠と相能くせず、然も、顯忠、又士を犒はず、士憤怒し、遂に潰えて歸る。金人、亦た解いて去る。上、恢復に銳意なるも、此役、利あらず、乃ち復た和を議す。陳康伯、罷む。湯思退、張浚、左右の相とな

張浚卒す

評 張浚國士の風格あり量然れども局狭少

る。浚、尙ほ都督を以て、師を視る。數月にして罷め、未だ幾ならずして卒す。浚、國に許すの心、白首まで渝らず、終身、和議を主とせず、遺命して、其二子に付するに、中原を復し國耻を雪ぐ能はずんば、先人の墓に耐葬するを得ずといふを以てす。

湯思退、密に虜を召し和を議するの跡あり。言者、論じて罷む。之を竄す、道に死す。康伯、復た相たり。和議成る。之より先、國書、大宋は大の字を去り、皇帝は皇の字を去り、書は君臣の禮を用ゐ、再拜等の語あり。金使至れば、起立して金主の起居を問ひ、坐を降つて書を受く。奉使の者は、自ら陪臣に同じく、館使の屬、皆、其來使を拜す。是に至つて、始めて上を稱して宋皇帝となし、

止だ叔姪の國となし、歲貢を易へて歲幣となし、歲幣は十萬の數を減じ、地界は紹興の時の如くす。然も、餘禮は、往々竟に盡く改むる能はず。上、終身之を憤る。この後、屢ば河南陵寢の地を還し、受書の禮を改めむを請ふ。金人、卒に従はず。蓋し、上、復讐に志ありと雖も、然も能く其志を輔くる者なし。陳康伯卒せしより後、共适、葉頤、魏杞、蔣芾、陳俊卿、虞允文、梁克家、曾懷、葉衡、史浩、趙雄、王淮、周必大、留正、相繼いで相となる。惟だ、俊卿、允文、並に相たるの時、北方を經營するの議あり。然も、俊卿、持重して卒に允文と合はず。允文の爲す所、人、亦た其虚誕を議し、竟に效あらず。浩の如きは、尤も兵を用ゆるを主とせず。必

南 宋—孝宗皇帝—

大は、廟堂に従容として、善類、引進する所多し。朱熹、淳熙十五年を以て召さる。必大、相たるの時なり。初め、程頤、徽宗の世に卒し、其徒楊時、欽宗、光堯の時に在つて、皆擢んでらる。趙鼎、頤を識るに及ばずと雖も、然も、其學を主張す。之を惡む者、楊時を以て還魂となし、鼎を尊魂となし、胡安國を強魂となす。其後、又、尹焞あり、召されて經筵に入る。焞は、蓋し頤が晩年の高弟なり。士大夫、程氏の學を名づけて道學といひ、時好の貴ぶ所、或は此名を冒して以て進み、時好同じからざれば、亦た多く此名を以て世に擠せらる。延平の李侗、學を楊時の門人羅從彦に受く。而して、熹、又學を侗に受く。胡銓、嘗て、熹を光堯に薦む。熹、至ら

朱熹封事を進む

張栻曰く爲にする所

ず。顯道以來、屢ば召せども起たず、特旨、秩を奉祠に改め、召して館に入るれども就かず。後に、南康の守となる。浙東荒る。熹を提舉に除し、往いて之を救はしむ。闕を過ぐるや、嘗て一たび入つて事を奏す。是に至つて、召對して兵部郎に除す。侍郎林臬と合はず、即ち奉祠して去る。數月、復た召す。熹、辭し、唯だ封事を進めて、天下の大本と今日の急務とを言ふ。大本は陛下の心に在り、急務は、太子を輔翼し、大臣を選任し、綱維を振擧し、風俗を變化し、民力を愛養し、軍政を修明す。六者は是れなりと。熹の同志に廣漢の張栻といふ者あり、魏忠獻公浚の子なり。其學、之を胡宏に得たり。宏は安國の子なり。栻の言に曰く、爲にする所あつて爲すも

南 宋—孝宗皇帝—

んで、至尊壽皇聖帝となす。周必大、罷む。留正、葛邲、左右の相となる。改元して紹熙といふ。皇后李氏は、大將李道の女なり。悍にして妬、亟ば太子嘉王を立てて儲嗣となさむと欲し、内宴に因つて、壽皇に請ふ。許さず。后不遜、壽皇怒語あり、后、之を銜み、乃ち誣罔を造り、壽皇廢立の意ありといふ。上、驚恐して疑疾を得るを致す。後宮、暴死の者あるを聞くに及びて、上、震懼す。疾、愈よ甚しく、復た重華宮を過ぎず、兩載に近くして、始めて、一たび至る。壽皇、彌よ憐ばず、上、亦た疾を視ること能はず、壽皇、重華に居て、五歳を踰え、壽六十八にして崩す。上、喪を執る能はず、一日忽ち地に仆る。中外危懼す。太皇太后、嘉王を立つ、之を

寧宗皇帝となす。

【寧宗皇帝】名は擴、初め嘉王に封せらる。孝宗崩じ、光宗疾病なり。知樞密院事趙汝愚、密に翼戴の議を建て、憲聖慈烈吳太皇太后、宗社を以て憂となすを知り、將に事を白せむとして、其人を難んず。知閣門事韓侂胄といふ者あり、錡の曾孫にして、太皇の女弟の子なり。因つて、入つて白す。太皇簾を垂れて、嘉王を引き、入つて位に即かしめ、代つて高宗の喪を執らしむ。中外危疑する者、乃ち定まる。光宗、壽康宮に居り、後六年にして崩す、壽五十四。上の嘉王たるや、黃裳、翊善たり、講説開導す。光宗、嘗て宣諭して曰く、嘉王、學に進むは、皆、卿の力なり。裳曰く、若し徳に進み

趙汝愚

業を修め、古先哲王に追蹤せむと欲せば、須らく、天下第一の人を尋ねて、乃ち可なるべしと。誰となすを問ふや、朱熹を以て對ふ。彭龜年、繼いで、宮僚となり、講に因つて、毎に熹の説に及ぶ。上心を傾ぐることに、既に久し。熹、光宗の時に在つて、漳州に守たり、後、潭州に守たり、湖南安撫となる。上の登極に至つて、首として、召されて、待制兼侍講に除せらる。熹、未だ至らず、既に近習事を用ゐ、御筆指揮して、皆漸あるを聞き、深く之を憂ふ。留正罷む、汝愚、相となる。韓侂胄、自ら定策の功あるを負んで、不次の賞を希ふ。汝愚、肯て驟に除せず、遂に怨む。汝愚、政を爲す、方に務めて、善類を引進し、僥倖を裁抑す、小人滋す悦ばず、相與

に共に之を排す。朱熹、既に至る。上疏して、侂胄に忤ふ、朝に在ること、四十六日にして罷む。言者、以爲へらく、熹、宮祠の命ありと。遠近相弔ひ、天下の大老、之を去らば、誰か去るを欲せざらむ、若し正人盡く去らば、何を以て國を爲めむと。汝愚、袖より内批を還して、且つ諫め、且つ拜すれども、聽かず。侂胄、併せて、汝愚を逐はむと欲す。然も、其名を難かる、或ひと、之に教へて曰く、彼は宗姓、誣ふるに、社稷を危うするを以てせば、一網にして盡きむと。侂胄、之を然りとす。汝愚、相位に在ること、數月にして罷め、しきりに貶竄せられ、藥を服して死す。侂胄、李沐、何澹、劉德秀、胡紘、沈繼相等を用ゐて、鷹犬となし、善類を搏撃

して遺すなく、彭龜年、劉光祖、章穎、葉適、徐誼、沈有開、吳獵、黃由、黃度、鄧駟、陳傅良、樓鑰、鄭湜、李祥、楊簡、呂祖儉、曾三聘、游仲鴻、項安世、孫元德、袁燮、陳武、汪遠、范仲黼、黃灝、詹體仁等、貶逐、勝げて紀すべからず。黨人の姓名を籍記し、目して僞學といひ、朱熹を以て首となし、籍に在る者數十人。蔡元定、熹の累に坐して、道州に編管せられ、大學生楊宏中等六人、亦た上書して黨人を救ふに坐して編管せらる。留正、嘗て、黨人を引用するを以て、亦た黜竄せらる。俞端禮、京鏜、謝深甫、相繼いで、相となる。

朱熹卒す

朱熹、慶元庚申を以て卒す。時に僞學の黨禁、嚴なりと雖も、會

葬する者、亦た數千人。呂祖泰、上書して、僞學を雪ぐを論じ、乞うて侂胄及び其黨蘇師旦、周筠を誅し、陳自強の徒を罷逐し、周必大を召任せむを乞ひ、然らざれば、事、將に測られざらむとすといふ。書出づ。中外大に駭く。杖一百、面を刺さずして欽州に配せらる。必大、亦た坐して、謫降せらる。熹、没して、年を踰えて、黨禁稍や解く。諸人、或は官を復し、自ら便にす。然れども、消沮變化の餘、風俗、既に大に壞る。

謝深甫、罷む。陳自強、相となる。侂胄、太師平原郡王を以て、軍國の事を平章し、權、人主を傾け、威、上下を制し、服御、乘輿に擬し、土木、禁苑より侈り、諛者、稱して、恩主聖相となすに至

蒙古部帝と稱す

る。或は、詩九章を作り、每章、一の錫字を用ゆ。侂胄、亦た辭せず。罪惡を稔積し、事を生じ、邊を開くに至つて極まる。之より先蒙古部あり、北方に興る。金の世宗の時に在つて、既に強盛、帝と稱す。環の立つに至つて、蒙古の兵、來つて、便ち長驅す。金、始めて多事。侂胄、金、この釁あるを聞き、謂ふ、中原圖るべしと。吳曦といふ者あり、前の蜀帥吳挺の子、璘の孫なり。吳氏、世、西陲に職とし、威、西蜀に行はる。其子孫を京に留む、蓋し、累朝遠慮。曦、異志あること久し。蜀に歸らむと欲するも、得べからず。侂胄、歸らしむる數年、蓋し、西蜀をして兵を出さしめむと欲す。開禧二年、丙寅。金を伐つる詔を以て、四方諸路に告げて、師を

元の太祖成吉思汗即位
一す時に西紀
二〇六な

進む。曦、首として、關外四州を以て金に獻じ、封を求めて、蜀主となる。尋いで、即ち、帝と稱す。李好義、楊巨源が安丙と密に謀るに頼つて、曦、僭號すること、月を踰えて誅せらる。この歳、元の太祖、幹難河の源に即位す。太祖、姓は奇渥溫氏、諱は鐵木眞、蒙古部の人なり。其先世、蒙古の部長たり。太祖の父に至つて也速該といひ、始めて、諸部落を併吞し、愈よ強大、後、追諡して烈祖神元皇帝といふ。初め、神元、塔塔兒部を征し、其部長鐵木眞を得たり。宣懿后月倫、適ま太祖を生む、手に凝血を握る、赤石の如し。神元、之を異とす。因つて、獲る所の鐵木眞を以て、之に名づく、武功を志るすなり。元年、大に諸王群臣を會し、

九游の白旗を建てて位に即く。群臣、共に尊號を上つて、成吉思汗といふ、時に金の章宗泰和六年なり。

丁卯、開禧三年。時に、北伐諸軍の向ふ所、潰散して、退かざるはなし。金人、大に兵を發し、しきりに蜀漢荆襄兩淮諸郡を陷る。東南、大に震ふ。亟に使を遣して、金に通謝せしむ。而して、侂胄、兵を弄するの意、猶ほ未だ已まず。中外、之を患ひ、遂に兇を誅するの議あり。皇后楊氏、書史を知り、古今に通ず。當時、侍郎史彌遠、密策を建つ。而して、旨、中より出づる者、皆、后、實に之を爲す、一日、侂胄、入朝す。彌遠、殿帥夏震をして、兵を以て、之を塗に邀へしめ、擁して、玉津園に出で、之を推殺す。

之より先、元の太祖、西夏を征し、力吉里塞を抜いて還り、この秋に至つて、再び之を征す。

戊辰、嘉定元年。陳自强、竄死し、蘇師旦、斬に處し、周筠、決配せらる。侂胄の首を函して金に謝し、和議、復た成る。錢象祖、相となり、史彌遠、累遷して、象祖と並び相たり。象祖、罷む。彌遠、獨り相たり。

金の章宗璟、在位二十年にして歿す。子なし。世宗の別子允濟を立つ、璟に於て叔たり。

己巳、嘉定二年。春、元の太祖、河西に入り、屢ば西夏の兵を破る。夏主李安全、女を納れて和を請ふ。

庚午、嘉定三年。金、元を討つを謀り、烏沙堡を築く。太祖、將を遣し、襲うて其衆を殺し、遂に地を略して東す。初め、太祖、歳幣を金に貢す。金主、衛王允濟をして貢を靜州に受けしむ。太祖、允濟を見て禮を爲さず、允濟怒り、歸つて兵を請うて、之を攻めむと欲す。金主環の殂するに會し、允濟、位を嗣ぐ。詔あり、國に至り、傳言して拜すべしといふ。太祖、金使に問うて曰く、新君は誰とかなす。曰く、衛王なりと。太祖、遽に南に唾して曰く、我、謂ふ、中原の皇帝は、是れ天上の人と做すと。此等も亦た之を爲すか。何を以て拜するを爲さむと。即ち馬に策つて去る。金使、還つて言ふ。允濟、益す怒り、太祖の再び入貢するを俟つて、之を害せむと

欲す。太祖、之を知り、遂に金と絶つ。

辛未、嘉定四年。春、元の太祖南侵し、金兵を敗り、群牧監を襲ひ、其馬を驅つて還る。之より、連歲、金の州郡を攻取す。

癸酉、嘉定六年。金主衛王允濟、在位五年、歳として兵を受けざるはなく、幾んど、支ふる能はず、且つ將士の心を失ひ、大將に弑せらる。追廢して、東海郡侯となし、豊王洵を立つ、環の兄なり、之を宣宗となす。太祖、兵を三道に分つて、並び進んで燕南、山東、河北の五十餘郡を取る。

甲戌、嘉定七年。元の太祖、蹕を燕北に駐む。金主、岐國公主及び童男女五百、馬三千と金帛とを、以獻して、和を乞ふ。許さるる

と雖も、燕えんに自立する能はざるを度り、五月、汴べんに遷り、丞相完顔福興を留めて、太子守忠を輔けて、燕に居らしむ。太祖、兵を遣して、之を圍む。守忠、汴に走る。後、一年にして、燕京陥る。元兵、河東より河を渡つて南し、汴を距ること二十里にして去る。金人、之より、地勢益す覺まり、山東、之に叛き、東は河を阻て、西は潼關を阻つるのみ。宋の川蜀、淮漢を窺ひ、以て自ら廣めむと欲し、遂に盟を敗つて來侵す。宋、黃榜を以て、忠義の人を募り、進んで、京東路を討つ。忠義李全、歲の戊寅を以て、衆を率ゐて來歸す。全は、もと澧水縣の弓手、開禧乙丑の間に在つて、既に、嘗て、募に應じて、其縣を焚く。

木華黎

丁丑、嘉定十年。元、木華黎を以て太師となし、國王に封じ、諸軍を率ゐて南征し、大名府、定、益、都、淄、萊等の州に克つ。戊寅、嘉定十一年。元の木華黎、西京より河東に入り、太原、平陽及び忻、代、澤、潞等の州に克つ、この歲、西夏を伐つて、其王城を圍む。夏王李遵頊、西京に走る。高麗王暎、元に降り、歲貢方物を請ふ。己卯、嘉定十二年。西域、元の使者を殺す。太祖、親征す。庚辰、嘉定十三年。元の木華黎、地を徇へて、眞定に至り、又河北諸郡を徇ふ。壬午、嘉定十五年。元の太子拖雷、西域の諸城に克ち、遂に太祖

と會す。秋、金主、復た使を遣して和を請ふ。太祖、時に回鶻國に在り。之に謂つて曰く、我、さきに汝の主しゆに令して、我に河朔の地を授け、汝の主をして、河南王となし、彼此兵を罷めむとす。汝の主、從はず。今、木華黎既に盡く之を取る。乃ち始めて來り請ふやと。遂に許さず。

癸未、嘉定十六年。春三月、元の太師魯國王木華黎卒す。

五月、元、始めて、達魯花赤を置いて、郡縣を監治せしむ。金の章宗珣、在位十二年にして殂す。子守緒、立つ、之を哀宗となす。

甲申、嘉定十七年。元の太祖、東印度に至り、鐵門關に駐まる。

耶律楚材

一獸あり、鹿形馬尾、綠色にして一角、能く人言を作す。侍衛の者に謂つて曰く、汝の主、宜しく早く還るべしと。太祖、以て耶律楚材に問ふ。曰く、この獸は、角端と名づけ、能く四方の語を言ふ。生を好んで、殺を惡む。是れ、天、符を降し、以て陛下に告ぐ。願はくは、天心を承けて、この數國の人命を宥せよと。太祖、即日、師を班す。

歳の丁丑より以後、宋、金と戦ひ、迭に勝敗ありと雖も、然も、三邊、歳として、其擾を被らざるなし。上、在位三十年、改元する者四。謙恭仁儉、終始一の如し。然れども、慶元、嘉泰、開禧、凡そ十三年は侂冑の政、嘉定十七年は彌遠の政なり。壽五十七にして

崩す。彌遠、定策して嗣を立つ、之を理宗皇帝となす。十一年、
 【理宗皇帝】初名は與莒、宗室追封は榮王、諡は文恭、希瓊の子、
 太宗十世の孫なり。寧宗、子多けれども育せず、宗室の子を鞠ふ、
 名は詢、立てて太子となす。薨す。初め、皇從弟沂の靖惠王柄、子
 なし。嘗て、宗室の子を以て、名を貴和と賜うて、之が後となす。
 太子詢を失ふに及び、遂に貴和を立てて皇子となし、名を竑と賜
 ひ、濟國公に封す。竑、慧にして輕、嘗て史彌遠の權を專にするを
 疾んで、異日容すべからずと謂ふ。彌遠、聞いて、之を惡む。故
 に陰に之が計をなす。與莒、幼にして弄を好まず、群兒聚嬉、輒ち
 獨り高きに登り、坐して動かす。長上、見る者、指して以て群兒に

語つて曰く、汝曹、この人に效はざるか、恰も一大王に相似たりと。
 群兒、毎に其下に羅拜す、遂に趙大王の號あり。彌遠、物色して之
 を得たり。嘗て、取つて、舉に應じ得たり。特旨、官に補す。竑、
 既に寧宗の子となる、遂に與莒を以て沂王の後となし、名を貴誠と
 賜ひ、邵州防禦使に除せらる。寧宗大漸、乃ち中宮に白し、貴誠を
 以て皇子となし、昀と改名し、遺詔を宣べて、位に即かしめ、竑を
 濟陽郡王に進め、出でて寧國府に判たらしむ。恭聖仁烈楊后、同じ
 く政を聽く。事定まつて、然る後に、簾を撤す。
 乙酉、寶應元年。時に、外議籍籍、亂を作し竑を立てむと謀る者
 あり。事克たずして、皆死す。李全、楚州に在り、制置許國と相失

す。國を殺し、亦た問罪を以て辭となし、兵を擧げて南向し、揚州を圍み、幾んど陷る。

丙戌、寶慶二年。元の太祖、西夏を伐つて、甘肅等の州を取り、遂に沙陀を踰えて、黄河九渡に至る。

丁亥、寶慶三年。元、夏を滅し、夏主李睨を以て歸る。

元の太祖
一十二時に西紀

七月、元の太祖、六盤山に殂す。殂するに臨んで、左右に謂つて曰く、金の精兵、潼關に在り、南は連山に據り、北は太河を限る。以て遽に破り難し。道を宋に假るに若くはなし。宋金は世讐、必ず能く我に許さむ。乃ち、兵を唐鄧に下し、直に汴京を擣け。汴、急なれば、必ず兵を潼關に徴さむ。然れども、數萬の衆を以て、千里

赴き援くれれば、人馬疲弊、至ると雖も戦ふ能はず、之を破ること必せりと。言訖つて殂す。在位二十二年。壽六十六。起輦谷に葬る。至元二年冬、追諡して、聖武皇帝といひ、廟を太祖と號す。太祖深沈にして大略あり、兵を用ゆること神の如し。故に能く國を滅すること四十。其助績甚だ衆し。史の記載、備はらず、惜い哉。太祖既に崩す。皇子窩濶台、霍博の地に留まる。國事屬する所なし。皇子拖雷、國を監し、以て皇太子の至るを俟つて、之を立つ。越えて二年、皇太子、始めて立つ、之を太宗となす。

己丑、紹定二年。元の太宗、名は窩濶台、太祖の第三子。母を光獻皇后弘吉刺氏といふ。是歲夏、喪に奔り、忽魯班雪不只の地に至

る。皇弟拖雷、來り見え、大に諸王百官を會し、太祖の遺詔を以て位に即かしむ。始めて、朝儀を立て、皇族尊屬、皆、班に就いて、以て拜す。

元、始めて倉廩を置き、驛を立て、命を傳ふ。

庚寅、紹定三年。元、兵を遣して、京兆を取る。七月、太宗、自

ら將として金を伐つ。皇弟拖雷、姪蒙哥、師を率ゐて從ふ。

辛卯、紹定四年。春、趙范、趙葵、大に李全を揚州城下に敗る。

時に、上元燈を張るに屬し、全、平山堂に置酒高會す。城中謀して

知り、夜、兵を遣して、其不意に出でて、之を劫す。全、走つて濠

に陥り、亂槍に斃さる。其餘は、奔走して逃げ去る。

二月、元の太宗、鳳翔に克ち、洛陽、河中の諸城を攻めて、之を

下す。五月、元、使を遣し、來つて、道を假る。宋、之を殺す。

八月、元、始めて、中書省を立て、從官の名を改め、耶律楚材を

以て、中書令となし、粘合重山、左丞相となり、鎮海、右丞相とな

る。

十二月、元の太宗、河中を取る。太弟拖雷、騎六萬を發し、兵を

分つて、西、和州より興元に入り、金房より襄陽に道して唐鄧に至

り、金人と陽翟に慶戰す。潼藍の戍、亦た潰え、西兵、畢く至り、

汴を合圍す。

壬辰、紹定五年。元の太宗、白坡より河を渡つて、鄭州に次し、

釣州を攻めて、之に克ち、遂に商、虢、嵩、汝等を取る。十四年、速不臺をして、金の汴京を圍ましむ。金主、其弟訛可をして、入つて質たらしむ。太宗還り、速不臺を留めて、河南を守らしむ。八月、金兵、汴を救ふ。諸軍、共に戦つて、之を破る。九月、太弟拖雷、師に卒す。金主守緒、圍を突いて出で、歸徳府に走る。元、再び王檝を使とし、來つて、夾攻して金を伐つを議せしむ。京湖制置使史嵩之、以聞す。朝臣、皆、以爲へらく、復讎の舉、遂ぐべしと。趙范、喜ばずして曰く、宣和、海上の盟、其初、甚だ堅し、以て禍を取るに及ぶ。鑑みざるべからずと。帝、從はず、嵩之に詔し、使に報じて、之を許す。嵩之、乃ち鄒伸之を遣して、報謝

せしめ、且つ汴京を夾攻するを議す。元人、成功を俟つて、河南の地を以て宋に歸すを許す。

癸巳、紹定六年。金主、歸徳に奔る。糧絶ゆ。乃ち蔡州に趨る。

其將崔立、汴京を以て、元に降る。四月、元の速不臺、進んで青城に至る。崔立、金の太后王氏、皇后徒單氏、荆王從恪等を以て、軍に至る。速不臺、北に送り還さしむ。

元孔子五十世の孫元楷を以て、衍聖公に襲封し、孔子廟及び渾天儀を整修す。

宋の丞相史彌遠、卒す。鄭清之、相となり、史嵩之、京湖の制帥となつて、襄陽に在り。南北、蔡州を夾攻するの約あり。嵩之、

孟洪を遣し、兵四萬人を以て、先づ至つて、其東南を圍ましむ、元兵、其西北を圍む。

甲午、端平元年。正月、金主守緒、位を宗室の子承麟に傳ふ。宋の孟洪、蔡州に入る。元師、之に従ふ。守緒、自經して死す。其首を函して、宋に送り、承麟を得て、之を殺す。金は、完顔旻、帝と稱してより、是に至るまで、九世、一百一十七年にして亡ぶ。

夏四月、金の俘を太廟に獻す。會ま淮帥趙范、趙葵、金人の亡びしに乗じて、恢復の計をなす。朝臣多く、以て未だ可ならずとなす。獨り、鄭清之、力めて、其説を主とす。帝、乃ち范に命じ、移つて、黄州を司らしめ、日を刻して、兵を進む。范の參議官丘岳

金九世一百一十七年にして亡ぶ時三十四なり

曰く、方に興るの敵、新に盟つて退く。氣盛に鋒銳なり。寧んぞ肯て得る所を捐て、以て人に與へむや。我が師、若し往けば、彼必ず突至せむ。惟だ進退據を失ふのみならず、罽を開き、兵を致すは必ず此より始まらむ。且つ千里長驅、以て空城を争ふ。之を得れば、當に饋餉を勤むべく、後、必ず之を悔いむと、范、聽かず。史嵩之、亦た言ふ、荆襄方に爾く饑饉す、未だ師を興すべからずと。杜杲、亦た出師の害を陳ず。范葵は、故の荆湖制帥趙方の子、兵に習ひ、攻取に銳意に、山東の忠義を募るに、皆、響應す。伸之、未だ回らず、然も、宋師出づ。伸之等、幾んど燕に羈留せられ、詭辭して搆と俱に来るを得たり。搆曰く、何すれぞ盟を敗るやと。之よ

り、淮漢の間、寧日なし。數日ならずして、汴人、城を以て、宋に
 付き、宋師、汴に入り、即ち洛に趨く。元兵、洛を成る者、幾も
 なくして、しばらく避け去る。宋師、洛に入り、數日ならずして、糧
 絶ゆ。元の生兵の大に至らむとするを聞いて、潰えて歸り、嵩之が
 和を主として、肯て糧を運せず、事を誤るを致すを咎む。
 乙未、端平二年。春、元、和林に城づき、萬安宮を作る。諸王拔
 都、太子貴由、姪蒙哥を遣して、西域を征し、太子闊端は蜀漢を侵
 し、太子曲出及び胡士虎は宋を侵し、唐吉は高麗を征す。
 丙申、端平三年。元、交鈔を印造して、之を行ふ。耶律楚材、請
 りて、燕京に於て編修所を立て、平陽に於て經籍所を立て、經史を

編集し、儒生梁陟を召して、長官に充て、王萬慶、趙著を以て之に
 副とす。秋、闊端、宋の關外の數州を取り、十月、成都に入り、秦
 鞏等四十餘州を取る。
 時に、和議既に復た諧はず、蜀、遂に破陥し、荆襄淮甸、歲とし
 て攻哨を受けざるはなし。
 元、耶律楚材の言を以て、始めて、天下の賦税を定め、上田は、
 每畝に税三升、中田は二升半、下田は二升、水田は一畝に五升、商
 税は三十分の一、五戸に絲一斤を出さしめ、以て諸王功臣湯沐の賜
 に供す。鹽は銀一兩毎に四十斤、永く定額となす。朝臣、皆、甚だ
 輕しといふ。耶律楚材曰く、將來必ず利を以て進む者あらむ、乃

ち、既に重しとなすと。丁酉、嘉熙元年、經筵に詔して、朱熹の通鑑綱目を進講せしむ。八月、元、諸路の儒士を試む。選に中る者、本貫議事の官に除して、四千三十人を得たり。元兵、地を略して、黄州に至る。宋の孟洪、之を敗る。戊戌、嘉熙二年。之より先、杜杲、元人の安豊の兵を却け、復た察罕八十萬の兵を廬州に敗る。後、儀眞の圍を解く。功を以て、權に刑部尙書たらしめ、復た敷文閣學士に進む。

呂文徳、兩淮出戰の軍馬を總統し、淮西招撫使に進む。文徳は安豊の人、魁梧勇悍、微時、薪を城中に鬻ぐ。趙帥葵、道傍に遺履

呂文徳

の長さ尺有咫なるを見て驚訝し、訪求して、之を得たり。之を麾下に留む。後、邊功を以て、顯官に至る。

元の塔思の軍、北峽關に至る。宋將汪統制、降る。之より先、曲出、張柔等を率ゐ、郢州を攻めて之を拔く。是に至つて宋の孟洪、復た襄陽を取る。

元の領中書行省楊惟中、太極書院を燕京に建て、趙復を延いて師となす。時に、謙溪周子の學、未だ河朔に至らず、惟中、師を蜀湖京漢に用ゐて、名士數十人を得、始めて、其道の粹なるを知り、乃ち伊洛の諸書を収集し、載せて、燕京に送る。師の還るに及びて、遂に太極書院及び周子の祠を建て、二程張楊游朱の六子を以て配食

註 六子は程

子兄弟、張
載、楊時、
游酢、朱熹
なり

せしむ。之に由つて、河朔、始めて道學を知る。庚子、嘉熙四年。春、元の太子貴由、西域の未だ下らざる諸部に克つ。元、州郡に敕し、盜を失うて獲ざれば、官物を以て之を償はしむ。國初、盜多し。令を下し、凡そ盜の去處を失すれば、本路の民戸をして、代つて償はしむ。民、之を苦んで、多く亡命す。是に至つて、徵を罷む。又、官民、回鶻の金銀を貸り、之を償ふ者、歲に加倍し、之を羊羔利といふ。往々、家を破り、妻子を以て質となすに至るも、終に償ふ能はず。耶律楚材、請うて、悉く官物を以て代へて還さしむ。凡そ七萬六千錠。仍つて令す、凡そ、假貸、歲久しきも、惟だ子本相伴うして止むと。著して令となす。

羊羔利の弊

辛丑、淳祐元年。宋、詔して、周敦頤を汝南伯に、張載を郿伯に、程顥を河南伯に、程頤を伊陽伯に、朱熹を徽國公に追封し、並に孔子の廟庭に従祀し、王安石の從祀を黜く。帝、孔子に謁し、遂に大學に臨む。

元の太宗殂す

十一月、元の太宗出でて獵し、鉞鐵鏢胡蘭に殂す。年五十六。起輦谷に葬る。後、追諡して、英文皇帝といひ、廟を太宗と號す。太宗、寛弘の量、仁恕の心より、時を量り、物を度り、擧に過事なく、華夏殷富、諸民業を樂み、行旅糧を齎さず、時に治平と稱す。元は、太宗殂してより後、皇后馬真氏、朝に臨んで制を稱すること凡そ五年、君を立てず。

南 宋—理宗皇帝—

甲辰、淳祐四年。之より先、鄭清之、相を罷め、喬行簡、李宗勉等、繼いで、政をなす、決斷する所なし。上、史嵩之の言を思ひ、督府より入らしめて、相となす。和を議せむと欲すと雖も、輒ち衆論に沮まる。嵩之、父彌遠の憂に丁る。計を聞いて、數日にして、乃ち行く。詔して、起復して相となす。言者、目して權姦となし、力めて、之を攻む、遂に復た相たらず。范鍾、游侶、鄭清之、射方叔、吳潛、董槐、程元鳳、丁大全等、相繼いで、相となり、毎歲、防秋を以て常事となす。

元の中書令耶律楚材、卒す。后、嘗て儲嗣の事を以て、楚材に問ふ。對へて曰く、是れ外臣の敢て知る所に非ず、自ら太宗遺詔の在

毎歲防秋を以て常事とす

評

は耶律楚材の文武兼備、才忠貞、美に忠、才に忠、國に誠、至に誠、貫す、馬に安、皇に祥、元を導、仁に社、敦に社、數に社、の臣と、しと、いふ

るあり、守つて之を行はば、社稷の幸なりと。后、嘗て、御寶の空紙を以て、幸臣奥都刺合蠻に付し、自ら書填して、之を行はしむ。楚材、奏して曰く、天下は先帝の天下、朝廷自ら憲章あり。今、之を紊さむと欲す。臣敢て詔を奉せずと。事、遂に止む。復た旨あり、凡そ奥都刺合蠻の奏准する所にして、令史之が爲に書せざる者は、其手を斷てと。楚材曰く、軍國の事、先帝悉く老臣に委す。令史、何ぞ與らむ。事、若し理に合はば、自ら當に奉行すべし。若し行ふべからざれば、死、且つ避けず。況んや手を斷つをやと。后、其先朝の助舊なるを以て、曲げて、敬憚を加ふ。楚材、天資英邁、夙かに人表に出づ。案牘、前に滿つと雖も、酬答、其宜しきを

一利を興すは一害を除くは若かず
一事を生ずるは一事を減ずるに若かず

失はず。色を正しうして、朝に立ち、勢の爲に屈せず。身を以て天下に徇せむと欲し、毎に國家の利病、生民の休戚を陳べて、辭色懇切なり。太宗、嘗て曰く、汝、又、百姓の爲に哭せむと欲するかと。楚材、毎に言ふ、一利を興すは一害を除くに若かず、一事を生ずるは一事を減ずるに若かずと。平居、妄りに言笑せず、士人に接するに及んで、温恭の容、外に溢る。其徳に感せざるなし。元の便宜總帥汪世顯、卒す。世顯、兵を善くして、能く將たり。儒を重んじ、民を愛し、勤儉にして自ら持す、古名將の風あり。丙午、淳祐六年。元の定宗、速蔑秃都に即位す。定宗名は貴由、太宗の長子なり。母を六皇后といふ、乃ち馬真氏。初め、太宗、旨

女主事を誤る

あり、皇孫失烈門を以て嗣となす。殂するに及んで后、朝に臨み、制を稱するもの五年、乃ち議して定宗を立つ。戊申、淳祐八年。元の定宗、戸位三年にして殂す。壽四十三。起輦谷に葬る。簡平皇帝と追諡す。元は、馬真氏、朝に臨んでより以來、法制一ならず、内外心を離る。定宗、既に殂し、皇后海迷失、子失烈門を抱き、簾を垂れて政を聽く。諸王大臣服せず。共に議して、太弟蒙哥を立つ。後二年、之を憲宗となす、即位す。辛亥、淳祐十一年。元の憲宗、名は蒙哥、太祖の第四子拖雷の長子なり。之より先、諸大臣、屈出の子失烈門を奉せむと欲す。久し

うして、決せず。是に至つて、兀良哈歹、以へらく、太祖の諸孫、
惟だ憲宗のみ、謙慎、宜しく立つべしと。遂に大に濶帖兀阿蘭の地
に會して、位に即かす。失烈門、服せず。憲宗、因つて、諸王の
異同ある者を察して、並に之を羈靡し、主謀者を取つて、之を誅夷
す。之に因つて、始めて定まる。

余玠、大に元人を興元に敗る。

元の憲宗、太弟忽必烈に命じて蒙古漢地民戸の事を總治せしめ、
府を金蓮川に開く。之より先、姚樞、蘇門に陰居し、道を以て自ら
任す。太弟、之を召す。樞至る。太弟の聰明にして、才、不世出、
己を虚しうして言を受け、將に大に爲すあらむとするを見て、乃ち

忽必烈

姚樞

其平日に學ぶ所を盡し、書數千言を爲つて、之を上る。首に二帝、
三王、學を爲すの本、治を爲すの序と治國平天下の大經を以て、彙
して八目となす。曰く修身、力學、尊賢、親親、畏天、愛民、好
善、遠佞。次に、時政の弊に及び、條三十となし、本末兼該、細大
遺さず。太弟太だ其才を奇とし、動けば必ず詢はる。

史天澤

元、史天澤、趙壁を以て河南經略使となす。

壬子、淳祐十二年。元の定宗の後及び失烈門の母、厭禳、事覺は
れしを以て、死を賜ひ、失烈門及び其黨を沒脱赤の地に謫す。

六月、元の憲宗、中州の漢地を以て同姓を封ず。太弟、汴京、關
中に於て、自ら其一を擇ぶ。姚樞曰く、南京は、河徙つて常なく、

余玠卒す

土薄く、水淺く、瀉鹵之に生ず。關中に若かず。其田、上の上、古しへより、天府陸海と名づく。太弟、遂に關中を請ふ。之に由つて、太弟、關中、河南の地を有す。
癸丑、寶祐元年。四川の制置使余玠、卒す。余晦を以て、四川宣諭使となす。

元の忽必烈、大理國を平らぐ。

甲寅、寶祐二年。時に、余晦、四川に宣撫たり。私恨を以て誣奏す、利路安撫王惟忠、ひそかに北境に通ず。大理の陳大方、旨を承けて、之を鍛成す。惟忠、將に市に斬られむとするや、色變せず、大方に謂つて曰く、吾、死せば、天に訴へむと。既に斬るや、血逆

胡打鬼

流して上る。未だ幾ならずして、大方入朝し、恍惚として、惟忠と還り、遂に卒す。之より先、朝廷、彭大雅を用ゐて蜀を理めしむ。甚だ威名あり。重ねて重慶城を築く。余玠、蜀郡平曠の地を遷して、險要を分治す。合州に釣魚山を治むるの類の如し。蜀に在ること二十年。民、藉つて以て安し。余晦に至て、貪糝功なく、敗れて要地を失ふ。和州の守劉雄飛を以て、四川制置となす。胡穎、淫祠を見る毎に、即ち之を毀つ。人之を胡打鬼といふ。廣東に經略たり。廣に佛寺あり、佛像中、巨蛇あり、時に出でて、人の祭祀を享く。僧、之に托し、疏を題して數千緡を得たり。穎、至つて、佛を毀ち、蛇を撃つ。其怪、遂に息む。

南 宋—理宗皇帝—

丙辰、寶祐四年。高麗王細差甫、雲南の會長摩合羅嗟、及び素州諸國、元に朝す。

元の憲宗、城市を建てて都會の所となさむと欲す。太弟、忽必烈言ふ、劉秉忠、天文地理の術に精しと。乃ち命じて、宅を相せしむ。秉忠、桓州の東、櫟水の北の龍岡を以て、吉となす。乃ち秉忠に命じて、之を營せしめ、名づけて、開平府といふ。三年にして、功を畢る。

丁巳、寶祐五年。元、回鶻、水精盆、珍珠傘を獻す、銀三萬餘錠に直すべし。憲宗曰く、方今、百姓疲弊、急なる所のものは錢のみ。朕獨り此あるも、何ぞ用ゐむと。之を却く。

劉秉忠

評 元憲宗獻を却くるの心何ぞ漢の文帝千里の馬を還へすの心と相似

たるや、仁君の志古今同軌といふべし

十月、元の兀良哈歹、安南を伐つて、其城を屠る。

戊午、寶祐六年二月。安南王、國を長子光昺に傳へ、使を遣し、方物を以て元に獻す。

元、回鶻、哈里發を討つて、之を平らぐ。九月、憲宗、親ら大軍を帥ゐて蜀に入り、苦竹隘を攻む。宋の守將楊立、張實、之に死す。

この時、元人、勢、流に順つて東下せむと欲す。一軍は大理國幹服の南より來り、邕桂の境を經、以て潭州に至り、一軍は江を渡つて鄂州を圍む。

丁大全を罷め、吳潛を以て左相となし、軍中に即いて、賈似道を拜して右相となす。趙葵は樞密策應使たり、杜庶は兩淮制置たり、

賈似道

南 宋一理宗皇帝一

夏貴は舟師を總領す。呂文德等、風に乗じて、戦つて勝つ。潛、向士壁を以て、潭を守らしむ。適ま南來の二哥元帥、宋の候騎に遇うて死す。潭の圍、先づ解く。高達等、鄂を守り、似道、漢陽に駐まつて、鄂の援となる。

己未、開慶元年。元の憲宗、合州を圍み、使を遣して、守將王堅を招諭せしむ。堅、使者を殺し、固守して、之を拒ぐ。

七月、元の憲宗、釣魚山に殂す、在位九年、壽五十二。後に追諡して、桓肅皇帝といふ。憲宗、剛明雄毅、沈斷寡言、宴飲を樂まず、侈靡を好まず、后妃と雖も、亦た制置に過ぎず。太宗の末年、群臣、權を擅にし、政、多門より出づ。憲宗に至つて、凡そ詔旨

元の憲宗殂す

必ず親ら起草し、更易すること數回、然る後に、之を行ふ。群臣を御すること甚だ嚴、嘗て諭して曰く、汝輩、若し朕の獎諭を得れば、即ち志氣驕逸して、災禍未だ随つて至らざるものあらず。汝輩それ之を戒めよと。時に、太弟、進んで鄂州を攻む。宋の守將張堅、守つて下らず、遂に之に死す。

似道、漢陽より鄂に至り、師を督す。而して、太弟忽必烈、城を攻むること、益す急、城中、死傷する者、萬三千人に至る。似道、大に懼れ、密に宋京を遣して、元營に詣らしめ、臣と稱し、幣を納るるを請ふ。太弟、許さず。會ま、合州の守王堅、人を遣して、鄂に走らしめ、憲宗の訃を以て似道に聞す。似道、再び宋京を遣して

元營げんえいに往ゆかしむ。太弟たいてい、亦また阿里不哥ありふかが尊號そんごうを襲つがむと欲ほするを聞きく。郝經たうけい曰いく、若しし、彼かれ、果はたして遺詔ゐせうと稱せうし、便すなはち位號ゐがうを正ただし、詔せうを中原ちゆうげんに下くだし、赦しやを江上かうじやうに行いはば、歸かへらむと欲ほするも得えむや。願ねがはくは、大王たうわう、社稷しゃしやくを以もつて念ねんとなし、師しを班かへして、和わを議ぎし、輜重しちゆうを置おき、輕騎けいきを率ひきゐて歸かへり、直ただに天都てんとに造いたり、二軍にぐんを遣たし、大行たいかうの靈れい昇ひかを逆ひかへ、皇帝てんていの璽じを收とめ、使しを遣たして、旭烈かたげ、阿里不哥ありふか諸王しよわうを召まし、和林かりんに會葬くわいさいし、官くわんを諸路しよろに差さし、安輯あんしよして、王わうの長子ちやうし眞金しんきんに命めいじて、燕都えんとを鎮守ちんじゆし、示しすに形勢けいせいを以もつてせば、大寶たいほう歸かへするあつて、社稷しゃしやく安やすからむと。太弟たいてい、之これを然しかりとし、乃すなはち似道しだうに之これを許ゆるし、且かつつ歲幣さいへいの數かずを約やくし、遂すなはち寨さいを抜ぬいて去さり、張傑ちやうけつ、閻旺えんわうを留とどめ、偏師へんしを

元世祖即位
(西紀一二
六〇)

以て、湖南なん兀良哈歹くつらうかふたいの兵へいを候まちせしむ。

庚申かうしん、景定元年けいていげんねん。元げんの世祖せいそ、名なは忽必烈くびらい、憲宗けんそうの同母弟どうぼていなり。憲宗けんそう、既すでに殂すす。阿藍荅兒あらんだる、渾都海等こんとかいら、世祖せいその弟てい阿里不哥ありふかを立てむを謀まる。憲宗けんそうの後ご、之これを聞きき、使しを遣たし、馳かせて鄂かくに至いたり、請こうて速すみに還かへらしむ。三月さんげつ、開平かいへいに至いたる。諸王大臣しよわうだいじん、同どうじく、勸進くわんじんす。三讓さんじやうして、乃すなはち位ゐに即つく。

元げんの兀良哈歹くつらうかふたい、張傑ちやうけつに鄂州かくしやうに會くわいし、師しを帥しゐて北きたに還かへる。宋そうの賈似道かじだう、夏貴かきに命めいじ、其後軍そのこうぐんを新生磯しんせいそに敗まり、遂すなはち其和きわを議ぎし、臣しんと稱せうし、幣へいを納なるるの事ことを匿かくし、表へうを上たてまつつて言いふ、鄂かくの圍かこみ、始はじめて解とけ、江面かうめん肅清しゆくせい、宗社そうしゃ危あやくして復またた安やすし、實じつに萬世ばんせい無疆むきやうの休やすなりと。

帝、以へらく、似道、再造の功ありと。詔を下して褒美し、賞賚甚だ厚し。

元の阿里不哥、和林の城曲に僭號す。

五月十九日、元、中統と建元す。

中統交鈔を進む。

元の世祖、自ら將として、阿里不哥を討つ。

元の廉希憲、大に西軍を姑臧に敗り、阿藍荅兒、及び渾都海を斬る。

元、梵僧八合思八を以て國師となす。

元、郝經を遣し、來つて盟を尋ねしめ、且つ前日和を請ふの議を

廉希憲

郝經

徴す。賈似道、既に朝に還り、其客廖營中をして福華編を撰して、鄂功を稱唱せしむ。朝廷、其和を求めしことを知らざるなり。

元の世祖、既に立つ。廉希憲、使を遣し、以て兵を息め、好を講

じ、軍に命じて北歸せしめ、恩威並に著はさしめむことを請ふ。世

祖、之を善しとす。然も、未だ其人を得ず。王文統、素より郝經の

才徳を忌み、乃ち經を遣して行かしむ。或ひと、經に謂つて曰く、盍

んぞ疾を以て辭せざる。經曰く、南北難を構へてより、江淮の遺黎

弱き者は俘略せられ、壯なる者は原野に死し、兵連り禍結ぶこと、

是れ亦た多し。聖上、一視同仁、兩國の好を通せむことを努む。徴

軀を以て不測の淵を踏むと雖も、苟くも、能く兵を弭め、亂を靖ん

聖上一視同仁

南 宋一理宗皇帝一

八九五

じ、百萬の生靈を鋒鏑の下に活かさば、吾が學、用ありとなすと。遂に行く。王文統、陰に李壇に諷し、宋を侵し、以て之を沮撓せしめ、手を假つて以て經を害せむと欲す。經、淮を踰ゆ。賈似道、姦謀の呈露するを懼れ、遂に李壇を以て辭となし、經を眞州の忠勇軍營に拘留し、驛吏防守、獄犴よりも嚴。介佐、或は堪ふる能はず。經、之に語つて曰く、命を將つて此に至る、死生進退、其彼に在るに聽かず。節を守つて屈せざるは、盡く其れ我に在り、豈に能く不忠不義、以て中州の士大夫に耻かしめられむや。但だ、公等不幸須らく死を忍び、以て待つべし。之を天命人事に揆るに、宋祚殆んど遠からずと。衆、其言に感じて、皆自ら振勵す。

評
士郝經は烈
命に使用して君
めざるもの
といふべし

帝、北使あるを聞き、宰執に謂つて曰く、北朝、使來らば、事體當に議すべしと。似道、奏す、和は彼の謀に出づ、豈に一切輕しく徇ふべけむや。若し、隣國に交るの道を以て來らば、當に入つて見えしむべしと。賈似道、閹臣を忌害す。兵退いて、費用を打算するの法を行ひ、此を以て之を汚さむと欲す。向士璧、趙葵、史巖之、杜庶等、皆、侵盜掩匿に坐し、官を罷めて償を徵す。而して、士璧、償ふ所、尤も多く、竟に安置されて死す。復た其妻妾を拘へて、之を徵す、尙ほ足る能はず。信州の謝枋得、趙葵の檄を以て、錢粟を給し、民兵を募つて守禦す。枋得曰く、以て趙宣撫を累すべからざるなりと。自ら萬緡を償ふ、餘は辨する能はず。乃ち似道に

謝枋得

上書して云ふあり、千金を以て募つて木を徙し、信を市人に取らむとし、二卵を以て干城を棄つ。豈に隣國に聞かしむべけむやと。遂に餘を徵するを免ずるを得たり。

呂文德、荆湖に制置として鄂州に知たり。

辛酉、景定二年。瀘州の守劉整、叛いて元に降る。之より先、遷蹕の儀を止むる者は吳潛、守城の力を盡す者は向士璧、斷橋の功を奏する者は曹世雄、劉整。既にして、似道、功を妬み、士璧、世雄を譖し、皆貶死す。整、既に禍を懼る。而して、蜀帥鄭興復、宿憾を以て、吏を遣して、瀘に至らしめ、軍前の錢糧を打算せしむ。適ま、北軍境を壓す、遂に叛き去る。

元、軍中俘とする所の儒士に命じて、贖うて民となすを聽るす。

七月、元、始めて、翰林國史院を立つ。

諸路提舉學校官を立つ。

元の諸將、西軍を敗る。阿里不哥、北に遁る。

元、皇子眞金を封じて燕王となし、中書省事を領せしむ。

壬戌、景定三年。呂文德、瀘州を復す。

元の江淮大都督李壇、京東漣海を以て來歸す。詔して、壇を封じ

て、齊郡王となし、其父全の官爵を復す。

元の宰臣王文統、壇と謀を通ずるに坐して誅に伏す。

元の史天澤、李壇を濟南に圍む。壇、復た元に降る。元人、之を

誅す。

元、董文炳を以て山東路經略使となす。

元、十路宣慰司を立て、諸路轉運司を立つ。

癸亥、景定四年二月。元、王德素を以て使となし、劉公諒を副となし、書を致し、來つて、其郝經を稽留するの故を詰る。

三月、元、始めて太廟を建つ。五月、始めて、樞密院を立て、太子燕王眞金を以て中書令に守たらしめ、兼ねて、樞密院事を判す。開平府を以て上都となす。元、姚樞を以て中書左丞となす。樞曰く、陛下、基業に於ては守成となし、治道に於ては創始となす。正に宜しく親族に睦まじくし、以て本を固くし、儲副を建て、以て祚

文徳黒灰團
と號す

を重くし、大臣を定めて、以て國に當らしめ、經筵を開いて、以て心を格し、邊備を修めて、以て虞を防ぎ、糧餉を蓄へて、以て款を待ち、學校を立てて、以て才を育し、農桑を勸めて以て生を厚くすべしと。世祖、之を納る。

呂文徳、瀘州を復す。文徳、黒灰團と號す。劉整、元に獻言して曰く、南人、惟だ黒灰團を恃む。然れども、利を以て誘ふべしと。乃ち、使を遣し、玉帶を文徳に獻じ、権場を襄城外に置かむことを求む。文徳、之を許す。使曰く、南人信なし、願はくは、土城を築いて、以て貨物を護せむと。文徳、許さず。使者、復た至る。文徳、朝に請うて、之を許し、権場を樊城外に開き、土城を麓門山

南 宋—理宗皇帝—

外に築き、互市を通じ、内に堡を築く。文徳の弟呂文煥、欺かるるを知つて、再び制置に申す、吏に匿さる。元人、又、白鶴城に於て第二堡を築く。文煥、再び申す。文徳、大に驚いて曰く、朝廷を誤る者は我なりと。即ち請うて、自ら赴き援く、會ま病んで卒す。甲子、景定五年。七月、彗星、長さ十數丈、芒角天を燭す、四更より東より見はれ、高くして方に斂まる。月餘乃ち見えす、楊棟、因つて指して蚩尤旗といひ、之に因つて、論に遇うて、國を去る。八月、元、燕京を以て、中都大興府となす。劉秉忠、都を燕に定めむことを請ふ。世祖、之に従ふ。至元と改元す。時に阿里不哥の兵、屢ば敗る。是に至つて、

諸王玉龍、答失罕、速帶、音里吉合、及び其謀臣不魯花、脱忽思等と來歸す。詔す。諸王は、皆太祖の裔なりと。並に釋して問はず、其謀臣不魯花のみ誅に伏す。元、諸路行中書省を立つ。

冬十月。上、崩す。在位四十一年。改元するもの八、寶慶、紹定は、彌遠十年の政、端平の初元には、善類朝に滿ち、眞徳秀、魏了翁あつて、執政侍従人たり、以て慶曆、元祐に比す。嘉禧より以後淳祐に至るまでは、嵩之、數年の政あり。嵩之、既に去り、淳祐より寶祐に至るまでは、正人、邪を指して邪となし、邪人、正を指して邪となし、互に消長をなす。而して狼狽すること、開慶丁大全の

政に如くはなし。景定と改元あるや、大金と吳潛と人品同じからずと雖も、各竄を以て死し、似道、獨り相たり。遂に國政を執る。末年、寢や君臣相猜むの跡あり、未だ更變するに及ばずして崩す、壽六十一。上、臨御以來、終始、周程張氏及び朱張呂氏義理の學を崇獎す、故に廟を理宗と號す。太子立つ、之を度宗皇帝となす。

【度宗皇帝】初名は孟啓、福王與芮の子、理宗の猶子なり。理宗、子多けれども育せず、孟啓を宮中に鞠ひ、孜と改名し、又祺と改名し、立てて皇子となし、忠王に封せらる。既にして、儲に建て、廢と改名す。歳の甲子、位に即く。時は則ち、蒙古部、國を大元と號し、至元と紀元するの初なり。賈似道、政を專にして、平章軍國重

事魏國公に進み、相を立てて、以て自ら副とす。

臨安府の士人、葉李、蕭規等、上書して、似道が權を專にし民を害し國を誤るを譏る。似道怒り、他事を以て、罪して遠州に竄す。

馬廷鸞、留夢炎に詔して、侍讀を兼ねしめ、李伯玉、陳宗禮、范東叟、侍講を兼ね、何基、徐幾、宗政殿說書を兼ねぬ。

元、王盤を以て翰林學士承旨となす。

乙丑、咸淳元年。元、安童を以て右丞相となし、伯顔を左丞相となし、劉秉忠を以て太保となして、中書省事に參せしむ。

丙寅、咸淳二年。呂文煥、襄陽を守る。元人、互市を開いてより以來、城を築き、堡を置き、江心に萬人臺、撒星橋を起し、以て南

兵の援を遏め、時に師を出して、襄樊城外を哨掠し、兵威漸く振ふ。

似道、第を西湖の葛嶺に建てて、自ら娛む。五日に一たび湖船に乗じて入朝す。堂に赴いて事を治めず、吏、文書を抱いて、第に就いて呈署し、他相は紙尾に書するのみ、内外諸司の彈劾薦辟舉削、關白するに非ざれば、敢て行はず、一時正人端士、斥罷殆んど盡く。吏、争つて、賂を納れ、以て美職を求め、帥閫監司郡守たるを圖る者、貢獻、勝げて計るべからず。趙潛輩、争つて、寶玉を獻す。貪風大に肆に、兵、外に喪へども、匿して以聞せず、民、下に怨むも、誅責無稽、敢て言ふ者なし。

關白

評 賈似道言路を塞ぎ君主を欺き亡國を早からしむ

日本國王に書を賜ふ

元、制國用使司を立て、阿合馬を以て使となし、世子南木合を封じて北平王となす。

日本國王に書を賜ふ。始めて、官吏の俸及び職田を給す。

元、太子忽哥赤を封じて雲南王となす。

丁卯、咸淳三年。元、史天澤を以て左丞相となし、忽都答兒、耶律鑄、降つて平章政事となり、伯顔は右丞に降り、廉希憲は左丞に降る。

戊辰、咸淳四年。襄陽、圍を受く。文煥、急を告ぐ。高達、范文虎をして、赴き援けしむ。道、通せず。二將、亦た命を用ゐず。

三學の士人、上書して、諸道の兵を調し、力を併せて、襄を救はむを乞ふ。報せず。

弓量を以て田畝を推排す。

葉夢鼎、位を辭す。允さず。徑に去る。

江萬里、馬廷鸞、相となる。

元、御史臺及び諸道提刑按察司を立て、新製蒙古字を行ひ、僧八合思馬を更號して帝師となし、堡を鹿門山に築き、諸路蒙古字學を立つ。

庚午、咸淳六年。江萬里、援兵を請うて襄を救ふ。議、合せず。罷めて去る。

上、一日、似道に問うて曰く、襄陽圍を受くる三年、奈何。對へて曰く、北兵、既に退く、陛下、何人の言を得たる。上曰く、適ま女嬪之を言ふありと。詰問し、誣ゆるに他事を以てして死を賜ふ。之より、敢て變事を以て言ふ者なし。

似道、權、人主を傾け、諛者、動もすれば、周公、成王を輔くるを以て之に擬し、親王外戚宦官近習、皆箝制せられて、敢て恣にせず、當世の望士も、亦た引用し、朝に登して儀羽となす。然も服心在らず、在外の監守郡司も、亦た廉介を參用し、其人に非ずして進むを得たる者は、各、蹊徑あり、最も吝賞誅貨を以て、將帥の心を失ふ。劉整、北に降り、策を獻じて、東南を取る。謂ふ、緩く

評 廉希憲許
衡劉秉忠及
皆元初の澤は
臣其言行傳
多ふべきもの

取れば、經營して蜀よりして下らむ、急なれば襄淮より直に進め
と。時に、諸將、北に降り、國の虛實を知る者、相繼ぐ。似道、方
に太平を粉飾するを以て事となし、略ぼ意を加へず。其人、
元の平章政事廉希憲、罷む。世祖、嘗て帝師の戒を受けしむ。希
憲、對へて曰く、臣、既に孔子の戒を受く。世祖曰く、汝の孔子も
亦た戒ありや。對へて曰く、臣とならば當に忠なるべく、子となれ
ば當に孝なるべし、是れなりと。方士あり、大丹を鍊らむを請ひ、
中書に敕して、其需むる所を給す。希憲奏して曰く、前世人主、多
く方士に誑惑せらる。堯舜壽を得るは靈を大丹に假らざるなりと。
世祖、之を善しとす。許衡を以て中書左丞となす。時に、阿合馬、

評 國家の事
權は兵民財
のみ

權を専らにし、上を無し、國を盡し、民を害し、嘗て其子を以て兵
柄を典らしめむと欲す。衡曰く、國家の事權は、兵民財の三者の
み。父、尙書省に位し、民を典り、財を典り、而して、又兵を典
る、甚だ重し。世祖曰く、卿、阿合馬の反を慮るか。衡、對へて
曰く、是れ反道なり。古しへより、奸邪未だ此に由らざる者あらず
と。世祖、衡の語を以て、阿合馬に語る。阿合馬、之に由つて、衡
を怨む。

辛未、咸淳七年。元の劉秉忠、許衡、定むる所の朝儀を進む。
司農司を立て、張文謙を以て司農卿となす。

水軍七萬を教へ、戰艦五十三を造り、環城を築き、以て襄陽に逼

評 大元と號
するの詔書
文辭雄渾詞
藻深遠朗々
誦すべし

許衡を以て集賢大學士國子祭酒となす。
十月、國を建てて、大元と號す。詔に曰く、誕に景命に膺り、四海を奄うて、以て尊に宅る、必ず美名あり。百王に紹いで、統を紀す、肇めて隆古に従ふ、獨り我が家のみに非ず。且つ、唐の言たるや蕩なり、堯、之を以て著稱す。虞の言たるや樂なり、舜、之に因つて號となして馴致す。禹、興つて湯造す、互に夏大と殷中とを以て名とす。世降つて以還、事殊に古しへに非ず。時に乘じて國を有つと雖も、義を以て制を稱せず。秦となし、漢となすもの、蓋し初起の地名に従ひ、隋といひ、唐といふもの、又、始封の爵邑に即

く。是れ皆百姓見聞の狃習に徇ひ、一時經制の權宜に要せらる。概するに至公を以てすれば少貶なきを得むや。我が太祖聖武皇帝、乾符を握つて、朔土より起り、神武を以て、帝圖に膺り、四に大聲を振ひ、大に土宇を恢にし、輿圖の廣き、歷古無き所、頃ろ耆宿、廷に詣り、奏章伸請して謂ふ、既に大業を成す、宜しく早く鴻名を定むべしと。古制に在つて、以て當れり。然れども、朕の心に於て何か有らむ。國號を建てて大元といふべし。蓋し、易經乾元の義に取る。是に大に治まり、庶品に流形す。孰れか資始の功を名づけむ。予一人寧を萬邦の爲に底さん。尤も仁を體するの要切なり。事、因革に従ひ、道、天人に協ふ。於戲、義に稱うて名づく、素より、之

多し。元、樊城を侵す。守將張漢英及び都統制范天順、牛富、之に死す。

評 許衡は元の名臣なり

元の國子祭酒許衡罷むるを乞ふ。之を許す。衡、家に居て勤儉、自治に強、公愛兼盡、嚴ならざるも整、閨門の内朝廷の若く然り。夫婦相待つこと、賓の如し。凡そ、喪葬一に古制に遵ひ、佛老を用ゐず、懷孟の閒之に化す。旁舍に僧德公といふ者あり、年百餘歳。嘗て其徒に謂つて曰く、老僧、苦行百年、亦た佛となる能はず、徒に不孝の人となり、祖宗を地下に見るを羞づ。但だ、願はくは、小僧輩、還俗以て汝が祖宗の嗣を壽せよと。之より復た弟子を度せず、蓋し之に化するなり。

陳宜中

甲戌、咸淳十年。賈似道、母の憂に丁る、隨つて起つて復す。陳宜中、僉書樞密院たり。

七月、上、崩す。在位十年。咸淳と改元す。壽三十五。似道、皇子暴を立つ、年四歳、之を孝恭懿聖皇帝となす。

「孝恭懿聖皇帝」名は暴、皇后全氏の出なり。太皇太后謝氏、朝に臨んで詔を稱す。徳祐と改元す。

兄建國公昺を封じて吉王となす、弟永國公昺を信王となす。

元の太保劉秉忠、卒す。秉忠、天下を以て己の任となし、知つて言はざるなく、言つて聽かれざるなく、其人才を薦むる、各、器に稱ふ。開平に城き、燕都に城かしむるや、皆、秉忠、其地を相す。

元の太保劉秉忠卒す

南 宋—度宗皇帝—孝恭懿聖皇帝—

是に至つて疾なくして、端坐して卒す。世祖、聞いて驚悼して、群臣に謂つて曰く、秉忠、朕に事ふる三十餘年、小心愼密、其陰陽術數の精は、唯だ朕のみ之を知ると。元、中書平章史天澤、中書左丞相伯顔に命じ、諸軍を帥ゐて南侵す。陛辭するや、世祖、之に諭して曰く、古しへの善く江南を取る者は、唯だ曹彬一人のみ。汝能く不殺なれば、是れ吾が曹彬たりと。天澤、疾あつて還り、尋いで卒す。之より先、世祖、醫を遣して、馳せて視せしむ。天澤、附奏して曰く、臣、大限終あらむ、死は惜むに足らず。唯だ願はくは、天兵江を渡るとき、殺掠を以て戒となせと。言訖つて卒す。天澤、忠亮にして大節あり、將相に出入すること五十年に近く、四朝に柱石

史天澤卒す

として百辟に師表たり、社稷の臣といふべし。其富貴權勢を視るや、跡を歛めて退避し、將に之に洩されむとするものの若し。故に能く始を善くし、終を令くし、開國の元臣となる。

元の伯顔丞相、大に兵を襄樊に會す。九月、降人劉整を以て騎兵を領して淮泗より出でしめ、呂文煥、舟師を領して襄陽より出でしめ、先を争うて向導し、水陸並に進み、沙市の新城を攻む。都統邊居誼、所部三千人を帥ゐて、力戦して之に死す。策應使夏貴、力戦す。元兵、其不意に出づ。兵敗る。西南岸に沿ひ、火を縦つて、廬州に歸る。宣撫使朱機孫、重兵を提げ、戦はずして、江陵に歸る。鄂州、降る。

天目山、崩る。

天下に詔して、勤王せしむ。

乙亥、徳祐元年。元の伯顔、阿里海牙を留め、兵四萬を以て、鄂

を守らしめ、而して、阿朮と、大軍を率ゐて江を渡り、流に順つて

東に下る。時に沿江の諸將、呂氏の部曲多く、風を望んで降附す。

江州降る、運使錢真孫、自ら縊る。

似道、軍馬を都督し、遷延して出でず。兵、既に建康に下ると聞

き、始めて、諸軍を率ゐて、行在を發し、迂道して行き、數日、始

めて蕪湖に達し、將に安慶府に趨り、下流の師を牽制せむとす。未

だ至らざること三日、安慶の帥范文虎は、呂氏の婿、既に降り、將

士復た固志なし。似道、官資を竭轉するを許す。諸軍誦つて曰く、

官資を要して甚を倣さむ。已未庚申の官資、何に在ると。似道答ふ

る能はず。鑼を鳴らす一聲、兵を珠金沙に退く。十三萬の衆、一時

に潰散す、似道、奔つて、揚州に入る。

江西提刑文天祥、兵を募つて勤王す。天祥は、吉州廬陵の人、丙

辰、進士の第に魁たり。

殿帥韓震、劫して都を遷さむを謀る。陳宜中、計を以て之を誅

す。

池州破る。通守趙昂發、將に死せむとす。其妻と訣る。妻曰く、

卿、能く忠臣たり、妾、顧みて忠臣の妻となる能はざらむやと。昂

趙昂發夫妻
忠死す

發、喜んで、衣冠を具し、共に俱に縊る。明日、伯顔、城に入つて之を憐み、衣棺を具へて葬る。

建康、破る。趙淮、之に死す。

京師、戒嚴す。朝臣、踵を接して、宵に遁る。

王爚、陳宜中等、似道が不忠不孝の罪を劾す。宜中、もと賈の恩を受く。是に至つて亟に賈を劾して以て自ら解く。

似道、貶に赴く。鄭虎臣、父の仇を以て、監押して漳州に至り、

厠上に即いて、其胸を拉して之を殺す。

張世傑、兵を以て入衛す。元兵、境に在り。陳宜中等、惟だ賈の

黨を攻撃するのみ、略ぼ備禦の策なし。司馬夢求、江陵の沙市鎮を

評 賈似道專
恣横暴國を
亡ぼし身亦
殺さる天罰
といふべし

監す。力戦して死す。諸帥を徴して、入衛せしむ。夏貴、管萬壽、

黃萬石等、至らず。

六月庚申朔、日蝕晦冥、雞、埒に棲み、咫尺人物を辨せず、已

より午に至り、明、始めて復す。

留夢炎、相たり。

文天祥、民兵峒丁、二萬餘人に將として入衛す。夢炎と意相樂ま

ず、尙書を以て、江浙制置に降し、吳門を守る。

州郡、しきりに降る。元兵、臨安を距ること百里、獨松關、急

を告ぐ。時に張世傑の軍五萬、諸路勤王の兵四十餘萬。天祥、世傑

と議す、兩軍堅く閩廣を守り、全城の王師血戦し、萬一捷を得ば、

評 文天祥器
局狭少

張世傑

猶は爲すべきなりと。世傑、大に喜び、議して師を出す。宜中、王師を以て、務めて持重し、詔を降して、之を沮み、使を遣して、和を乞ふ。

天祥等に詔して、兵を罷む。

潭州、陥る。時に、一軍は湖南より潭州を圍む。守臣李芾、戦守屢ば捷つ。八九月を経て、城、將に陥らむとし、闔門、之に死す。

丙子、徳祐二年。正月、秀王與翠、皇兄益王昰、皇弟廣王昺等を奉じて海に航す。

世傑、朝を去る。

元兵、高亭山に駐まる。都城を去ること三十里。

宜中、夜、遁る。

文天祥、右丞相たり、辭して拜せず。

賈餘慶、吳堅、相たり。

天祥、出でて軍前に使す。辭氣慷慨、議論して屈せず。伯顔、之を留む。

元兵、臨安に入る。賈餘慶等、三宮を奉じて以て降る。手詔して諸路に諭して、内附せしむ。

伯顔、宰執を遣し、先づ大都に赴かしむ。天祥、亦た舟に登つて北行し、鎮江に至り、間を得て逸し去る。

三宮、北に遷る。宮室、駙馬、宮人、内侍、太學生等數千人、皆

賈餘慶三宮を奉じて元に降る

遣中に在り。眞州を過ぐ。守苗再成、駕を奪はむとす。幾んど遂げむとして克たず。

五月、宋帝、上都に至り、瀛國公に降封す。帝、在位二年、改元するもの一、曰く徳祐。

益王、廣王、海道より温州に至る。蘇劉義、陸秀夫、來り會し、陳宜中、張世傑、海舟を以て福州に至る。謝太后の手詔を宣し、二王を以て天下都副元帥となし諸路の忠義を召す。五月朔、陳宜中、陸秀夫、張世傑等、共に益王昞を立てて帝となし、福州に即位す。之を端宗皇帝となす。

【端宗皇帝】名は昞、孝恭懿聖皇帝の兄なり。位に即いて、景炎と

改元し、はるかに、帝に尊號を上つて孝恭懿聖皇帝となし、太皇太后を壽和聖福至仁太皇太后となし、皇太后を仁安皇太后となし、度宗の淑妃楊氏を皇太后となし、同じく政を聽く。廣王昺を封じて衛王となす。陳宜中、左丞相たり。張世傑、少保たり。

文天祥、至る。右丞相に除せらる。宜中、世傑と異意なるを以て肯て拜せず。

九月、天祥、督を南劍州に開き、兵を募つて數千を得、遂に邵武軍を復す。冬十月、天祥、師を帥ゐて、汀州に次す。興化軍の通判張日中等來り會す。時に、贛寇猖獗、江閩廣の路を血にす。日中

等、天祥が開督勤王するを聞き、遂に各兵を起して來り應ず。天祥、趙時賞、張日中、趙孟滌を遣し、一軍を將ゐて贛に趨かしめ、以て寧都を取り、吳浚を遣し、一軍を將ゐて、雩都を取る。劉洙、蕭明哲、陳子敬、皆、江西より兵を起して來り會す。鄒鳳、元人と寧都に戦つて敗績す。武崗教授羅開禮、兵を起して永豐縣を復す。亦た死す。天祥、爲に服を製して哭す。

十一月、元の阿刺罕、董文炳、建寧府に入り、遂に福州を侵す。宜中、世傑、帝及び衛王、楊太后等を奉じて、海に航し、潮州より廣州に至り、富陽に趨き、謝女峽に遷る。

丁丑、景炎二年。阿刺罕、汀州に入る。文天祥、漳州に奔る。入

衛を謀れども、道阻して通せず、江廣の間に往來し、戦つて勝負あり。

吳浚、元に降り、因つて、漳に趨き、天祥に説いて降らしめむとす。天祥、責むるに大義を以てして、之を誅す。

三月、文天祥、梅州を復す。

四月、天祥、興國縣を復す。

五月、張世傑、潮州を復す。

天祥、梅州より江西に出で、遂に會昌縣を復す。趙時賞、張日

中の兵と、皆、之に會す。

元の中書政事廉希憲、卒す。希憲、江陵に在り、遠近化に向ふ。

元廉希憲卒

評 伯顔の廉
希憲評眞に
當れり

疾あつて召し還さるるに及びて、民、皆、涕を垂れて擁し送り、祠を建て、像を繪いて、以て之を祠る。世祖、歎じて曰く、復た大事を決する廉希憲の如き者あるなし。伯顔、亦た曰く、廉公は宰相中の眞宰相、男子中の眞男子と。世、以て名言となす。

六月、天祥、元人を雩都に敗り、遂に興國縣に次す。秋七月、張日中、趙時賞等をして、師を帥ゐて、吉贛諸縣を復せしめ、遂に贛州を圍む。

張世傑、師を回し、潮州より泉州を圍む。克たず。

帝の舟、潮州の淺灣に遷る。

元の李恆、兵を遣し、贛を援けしめ、然も、自ら將として、天祥

元の李恆

を興國に襲ふ。天祥、恆の猝に至るを意はず、乃ち兵を引いて走り、鄒瀾に永豊に即く。瀾の兵、先づ潰ゆ。恆、天祥を窮追す。天祥、方石嶺に至る。恆、之に及ぶ。鞏信、拒ぎ戦ふ。箭、體に被つて死す。天祥、空院に至る。恆、又之に及ぶ。張日中、奮つて力戦す。元兵、少しく卻く。恆、鐵騎を麾いて、横に之を撃たしむ。日中身に十餘創を被り、猶ほ十餘騎を手刃して死す。兵、悉く潰ゆ。天祥の妻歐陽氏、男佛生、環生、及び二女、皆執へらる。趙時賞、肩輿の後に坐す。元人、誰となすを問ふ。時賞曰く、我が姓は文と。衆、以て天祥となし、之を禽にす。天祥、之に由つて、身を挺するを得。其長子道生及び杜澣、鄒瀾と、騎に乗じて逸し去り、遂

時賞奮罵
して殺さる

に循州に奔る。散兵、頗る集まる。乃ち寸南嶺に屯す。幕僚客將、皆、執へらる。時賞、隆興に至り、奮罵して屈せず。刑に臨み、劉洙、頗る自ら辯ず。時賞、叱して曰く、死せむのみ、何ぞ必ずしも然らむと。是に於て、將佐幕屬、執へられて、皆死す。而して、天祥の妻子家屬、燕に送らる。二子、道に死す。

廣州、陷る。

十一月元の劉深、舟師を以て淺灣を襲ふ。張世傑、戦つて利あらず。帝舟を奉じて、秀山に走る。陳宜中、占城に之いて兵を求む、遂に復た還らず。十二月、帝、再び并陝に還る。颶風作る。帝病あり。元の劉深、復た舟師を以て、來つて并陝を襲ひ俞如珪を執ふ。

帝舟、謝女峽に遷る。

戊寅、景炎三年。張世傑、師を遣して、雷山を討つ。克たず。

三月、文天祥、兵を會して、麗江浦に次す。

元、張弘範を以て、都元帥となし、李恆、之に副たり。師を率ゐて、閩廣に入る。

帝舟、碙州に遷る。夏四月、帝、碙州に崩す。陸秀夫、衛王を立てて帝となす。之を帝昺となす。

【帝昺】端宗皇帝の弟なり。名は昺、位に即いて祥興と改元す。皇太后楊氏同じく政を聽く。之より先、群臣多く散じ去らむと欲す。陸秀夫曰く、度宗皇帝の一子、尙ほ在り、將に焉にか之を置かむ。

元の張弘範

古人、一旅一成を以て中興する者あり。今、百官有司、皆具はり、士卒數萬、天、若し未だ宋を絶やすを欲せざれば、是れ豈に國を爲すべからざらむやと。乃ち衆と共に帝を立つ、年八歳。適ま黃龍あり、海中に見ず。遂に祥興と改め、礪州を升せて翔龍縣となし、陸秀夫を以て左丞相となし、樞密使を兼ねしむ。時に、海濱に播越して、庶事疎略、時節朝會毎に、獨り、秀夫、儼然として笏を正して立ち、治朝の如くす。或は行中に在つて、凄然として泣下り、朝衣を以て涙を拭ふ、衣盡く濕ふ。左右、悲慟せざる者なし。首相に拜するに及び、張世傑と共に政を乗り、外は軍旅を籌り、内は工役を調す、すべて其手より出で、忽遽流離の中と雖も、尙ほ日に大學章

句を書し、以て勸講す。

六月、帝舟、新會の厓山に遷る。

大星あり、南に流れて海中に墜つ。小星千餘、之に隨ふ。聲、雷の如く、數刻にして止む。

天祥、帝の即位を聞き、上表して自ら江西に敗るるの罪を劾し、入朝を乞ふ。許さずして、少保を加へ、信國公に封ず。會ま、軍中大疫、士卒多く死す。天祥の子道生、復た亡し、家屬共に盡く。

元、許衡を以て集賢大學士となし、太史院事を兼領せしむ。

文天祥、潮陽に屯す。鄒鳳、劉子俊、皆、師を集めて之に會し、遂に盜陳懿、劉興を潮に討つ。興は死し、懿は遁れ、張弘範の兵を

文天祥執へ
らる

道みちいて、潮陽てうやうを濟わたす。天祥、力、支さへず、其麾下そのきかを帥ひきゐて、海豊かいほうに走まる。張弘正、之を追おふ。天祥、方まさに五坡嶺はなに飯はんす。弘正の兵、突とつ至しす。衆、戦いくさふに及およばず、皆、頓首とんしゆして草莽さうもうに伏ふす。天祥、執とらへらる。腦子のうしを吞のんで死しせず。鄒鳳そうほう、自刎じけいす。劉子俊りうしゆん、自ら詭いつはつて天祥となし、天祥を免めんすべきを冀こひねがふ。天祥を執とらへて至いたるに及びて、各眞かくしん偽ぎを争あらそふ、遂すなはち子俊ししゆんを烹にる。而して、天祥を執とらへて、弘範こうはんに見まえしむ。左右さうぶ之に命めいじて拜くつせしむ。天祥、屈くつせず。弘範、其縛そのはくを釋とき、客禮かくれいを以もて、之を見る。天祥、固かたく死を請こふ。弘範、許ゆるさず。或あるひと弘範に謂いつて曰いく、敵人てきじんの相さう、測はかるべからざるなり、宜よろしく、之を近ちかづくべからず。弘範曰いく、彼は忠義ちゅうぎなり、他たなきを保ほすと。族ぞく

屬ぞくの俘とりこにせられし者を求もとめて、悉ことごとく之に還かへし、舟中ふねちゆうに處おいて、以もて自みづから從したがはしむ。

端宗たんそうを厓山がいざんに葬はうむる。

元の阿里海牙ありかいが、海南かいなんより還かへつて上都じゆうとに師しす。

巳卯しぼう、祥興しやうこう二年ねん。正月しづがつ、元の張弘範ちやうこうはんの兵、厓山がいざんに至いたる。張世傑ちやうせけつ、力戦りきせんして、之を禦ふせぐ。弘範、之を如何いかともするなし。時に、世傑せいけつに甥せいかん韓かんあり、元師げんし中に在あり。弘範三たび、韓かんをして、宋師そうしに至いたつて、世傑せいけつを招まねかしむ。世傑、從まはずして曰いく、吾われ、降くだれば、生いきて且かつつ富貴ふうきなるを知る、但ただ義ぎは移うつすべからざるのみと。因よつて、古忠臣こちゆうしんを歷れき數すうして以もて之に答こたふ。弘範、乃すなはち文天祥ぶんてんしやうに命めいじ、書かきを爲つくつて、

評 陸秀夫、帝を海に溺す。忠臣の死に、人とも帝の側、然れども帝の純忠、情操に至る。

けず。弘範、舟師を以て、其前を犯す。南師、之に繼ぐ。宋師、南北より敵を受け、兵士皆疲れて、復た戦ふ能はず。俄に一舟の檣旗、仆るるあり、諸舟の檣旗、皆仆る。世傑、事の去るを知り、乃ち精兵を抽いて中軍に入る。諸軍、大に潰ゆ。元師、宋の中軍に薄る。會ま日暮れて風雨、昏霧四塞、咫尺辨せず。世傑乃ち蘇劉義と維を断ち、十六舟を以て港を奪つて去る。陸秀夫、帝舟に走る。帝舟大にして、且つ環結す、出走するを得ざるを度り、乃ち先づ其妻子を驅つて海に入らしめ、即ち帝を負うて同じく溺る。帝、崩す。後宮諸臣、從死する者甚だ衆し、越えて七日、屍、海上に浮ぶもの十餘萬人。因つて、帝の屍及び詔書の寶を得たり。既にして、世傑、復

評 張世傑、香を焚き、天を仰いで呼んで曰く、

評 張世傑、香を焚き、天を仰いで呼んで曰く、

た厓山に還つて、兵を收め、楊太后に遇ひ、奉じて、以て趙氏の後を求めて、復た之を立てむと欲す。楊太后、始めて、帝の崩せしを聞き、膺を撫して、大慟して曰く、我、死を艱關に忍んで此に至るものは、正に趙氏の一塊肉の爲のみ、今、望なしと。遂に海に赴いて死す。世傑、之を海濱に葬る。世傑、將に安南に趨かむとし、平章山下に至つて、颶風、大いに作る。舟人、岸に艤せむと欲す。世傑曰く、以て爲すなきなりと。香を焚き、天を仰いで呼んで曰く、我、趙氏の爲にすること、亦た已に至れり。一君亡びて、復た一君を立つ。今、又亡ぶ。我未だ死せざるものは、庶幾はくは、敵兵退かば、別に趙氏を立てて以て、祀を存せむとするのみ。今かくの若